

# 浅野誠

## 若者の生き方シリーズ 4

# 若者の 人生創造

2013年1月下旬

## はじめに

本シリーズ「1 人間関係・大人側の若者への対し方」(2012年7月)、「2. 学ぶ・働く・お金・文化スポーツ・旅移住」(2012年9月)「3. 進路創造・仕事」(2012年11月)に続くものだ。

2004年から2011年にかけてHPやブログに書いたもので綴った。

## 目次

※ 項目番号は、シリーズ全体を通したもの。各項目内では、ほぼ初出順で並べられている。

## 5. 人生創造

## 5 1. ストレーター・コースを問う

○ ストレーター 10~20代と50~60代	5
○ 若者の生き方——その2. 癒し・起業家・人生後半期の人々とのズレと連携	7
○ 競争・格差社会での「人生選択」から「人生創造」への転換を	9
○ 児美川孝一郎「若者とアイデンティティ」法政大学出版局2006年を読む	11
○ 偏差値依存型進路選択と子どもの将来希望・目標形成の弱さ	16
○ 工業化時代のライフコース≠ストレーターコース? 宮本本9	18
○ 「ライフコースの個人化」と人生創造 宮本本10	20
○ ライフコース前半期の変化と人生創造 宮本本11	22

## 5 2. 「標準」とは異なる生き方の探求

○ 新しい生き方基準をつくる会「フツーを生きぬく進路術17歳編」(2005年青木書店)を読む	23
○ 佐藤洋作・平塚真樹編著「ニート・フリーターと学力」(明石書店2005年)を きっかけにして考える	25
○ 「よりよい第二標準」へのオルターナティブな教育の課題を追究する新谷周平論文	28
○ 『若者と貧困』本1 リアルな現実提示と鋭い問題提起	31
○ 『若者と貧困』(明石書店2009年)2 国家と社会	32
○ 『若者と貧困』本3 「非標準的な生き方」への団塊世代の憧れ	33
○ 『若者と貧困』4 これまでの「標準コース」の問題性	35
○ 『若者と貧困』5 「標準でない」生き方の創造へ	37

○ 『若者と貧困』本6 人間関係上の貧困と経済上の貧困	38
○ 「迫られる自立像の転換」中西の指摘 『子どもの貧困白書』8	39
○ 「ノンエリート青年の社会空間」を読む1 本の概要	41
○ ノンエリート青年本2 「所与性のドグマ」と「ルール型生き方」	42
○ 「ノンエリート青年」本3 第二標準	44
○ 「ノンエリート青年」本4 「なんとかやってゆける」仕方	46
○ 「ノンエリート青年」本5 人間関係	48
○ 「ノンエリート青年」本6 家族形成	50
○ 「ノンエリート青年」本7 年収水準 金銭依存 沖縄	52
○ 「ノンエリート青年」本8 いろいろと	53

### 5 3. 人生の模索

○ 人生後半期創造を始めつつあるみなさんとともに 東海「非行」に向き合う親の会でのワークショップと語り合い	55
○ 困難を抱える若者への対応・・・生活指導学会での討論	57
○ 人生で大切にすること 看護大学授業	59
○ 若者の人生創造 生活本8	61

### 5 4. 人生おこし・若者人生物語

○ 乾ほか「明日を模索する若者たち：高校3年目の分岐」, Inuiほか「Comparative Studies on NEET, Freeter, and Unemployed Youth in Japan and the UK」を読む	64
○ 人生創造物語in沖縄 スタートへの想い	67
若者1 榕樹 工業高校→キセツ→大学入学	67
若者2 起業家への道を歩む毅	69
若者3 東京の先端企業を退社して沖縄に住みはじめた佐藤雅	70
若者4 介護一看護への道を共に歩む千春と功二	72
若者5 農業で模索する慎二たち	73
○ 沖縄移住の若者の生き方	75
○ 進路・仕事と恋・結婚・・・学生たちの人生創造物語	77
○ 10代若者が夢中になるものと、若者の人生おこし	79
○ 「人生おこし」に関心をもつ若者が読む 私の新刊本への反応	81

- 法経系大学生の人生おこし 「人生おこしの教育」補論 82

## 55. 生き方教育

- 久しぶりの琉球大学授業 多様な学生との出会い 83
- 『知的障害者』にかかわる『生き方』の教育のほうが蓄積が多い 84
- 教職受講沖縄学生にみる「進路指導」感覚の新しい様相 85
- 高校生の10年後のためにしていること・したいことを、重要性・現実性を基準にならべてみる 86
- 全生研大会「進路問題を考える」分科会での話題 87
- 「卒業→就職」という枠組みを越えた視野からの興味深い問題提起 89
- 井沼淳一郎さんの「はたらく・つながる・生きる」現代社会授業 92
- 「学校→雇用」構図の揺らぎ 世代間時代間のずれと協同 94

## 関連執筆文献

- 生徒との生き方の共同創造へ 『新英語教育』2002年9月号
- ワークショップ「人生創造を考える」 『中京大学教養論叢』43巻4号2003年
- 『人生創造』ワークショップ 『中京大学教養論叢』44巻3号2004年
- 異なる生き方を提起する 『生活指導』2005年8月号・
- 「ストレーター」秩序を超えて、若者の〈生き方〉を創る教育へ向かうには  
 ---フリーター・ニート論議とかかわらせて---
- 『中京大学教養論叢』46巻3号2005年
- 〈生き方〉を創る教育 大月書店2004年
- 浅野誠ワークショップシリーズNo.5 『人生創造』 2010年
- 「人生おこし」の時代——モノ・コト・ヒトとのつながりを充実させるなかで——  
 『ヒューマンスキル教育研究』20号2012年

## 51. ストレーター・コースを問う

2005年2月2日

ストレーター 10～20代と50～60代

この随想欄で造語した言葉、「ストレーター」について、である。受講生たちとの懇親会で話したら印象的だったらしく、早速自分がその通りであることに気づいてレポートしてきた学生があらわれた。

今回は、ストレーターは10～20代に限らず、そのあらわれ方は異なるとしても、世代を越えて、今日を生きている多くの人々にみられること、そのことをとくに10～20代と50～60代とを比較しながら述べてみよう。

10～20代では、学校や家族というまわりの環境のなかで、ストレーターの道を「歩まされてきた」人が多い。なおかつ「自分のことは自分で考えよ」というダブルバインド的環境のなかで。そしてその結果、10代後半から20代前半にかけて、「考え直し」「つまづき」を開始する人も多い。フリーターの多くもそうであろう。自分の人生創造にかかわる学生たちの発言やレポートをみてもそうした事例に多く出会う。親や先生の「いうことをきくいい子」で、成績も優秀できたが、「自分のことは自分で考えよ」といわれ、「自分のアイデンティティ探し」になるが、どうしたらいいかわからない。しばらく選択・決断をしないで、考えようと思う。といっても、そのやり方がわからなくて困ってしまうというのだ。

沖縄に限ってみると、そうしたタイプは17～18年前まではほぼいず、私が沖縄を去る80年代末に出始めたところだった。だが、現在はむしろそうしたタイプの方が多数派にさえなりつつある。ストレーターの出現は、企業社会型生き方（ないしは、1960年代型生き方）の登場と結合しているが、沖縄もここ10数年の間に、一挙に企業社会型に転化したということだろう。沖縄にしるそうでないにしる重要なのは、しばらく前まではこのストレーター的生き方で「成功」が保障されていたが、今や保障される人数が大幅に制限されてきた、という事実があることである。無論、積極的にストレーター的生き方を拒否して、創造的生き方を模索するものもいるが、多くは親・教師によって奨励されるストレーター的生き方をしてきたのに、ハシゴをはずされて、たちつくしている状況にある、ということである。

これに対して、50～60代のストレーターは、1950年代末から70年代前半にかけての高度経済成長期に10～20代を送り、それまでの農業を中心とする家業継承ではなく、被雇用者としての人生を模索創造してきた。そういう意味での「転職」を経験してきた。そして、その転職先（主として企業）で、「誠実に」「頑張って」「競争的」に彼らなりの成功を収めてきた。そういう意味での自信がある。

その自信をもとに、「いまどきの若い者は・・・」という形で、現在の10～20代をなじる発言、お説教をする人が多い。フリーター叩きの主力はかれらだろう。自信があればあるほど、現在の10～20代の苦境を理解しがたい。だが、重要なことは当の50～60代に今苦境にある人がかなりいるという事態だ。自信に

あふれる人は、そうした人々が目には見えないのか、それともストレーターとして勝利してきたためか、そうした人々を「敗北者」としてみつめ、それだけに一層、10～20代に勝利するよう激励し、ストレーター的生き方を奨励する。先日、60歳くらいのそうしたタイプの男性と会話する機会があったが、若いものなじりの発言に嫌気がさした私は、「今、一番苦しんでいるのは、50～60代男性なんではないですか。自殺率の高さは驚異的ですよ。」と問うた。

1950年代末から1970年代はじめは、時代の転換期であり、人々の生き方の転換期であった。その時期に形成された企業社会型生き方（1960年代型生き方）は、いまでは通用しないものになってきている。その生き方できた50～60代の方々が、その生き方を標準にして、10～20代をなじるのはもうやめましょう、と呼びかけたい。その生き方で苦しんでいるのは、当の50～60代なんだし。そしてもう一つ重要なのは、今は、当時の生き方の転換と匹敵する、というか、それ以上というべきか、そういう時代であり、その当事者は10～20代の若者だけでなく、50～60代自身もそうなのだ。先の会話のうちに、40代の方が、「20年後に、今のような年金給付があるとお考えなんですか」と60歳前後の方に問うたことは象徴的であった。

「成功」を収めてきた50～60代に多い発想は、これまでの60年代型ありようをどれだけ守れるか、あるいは困難な状況は一時的な不況のせいだから、景気回復を求めてガンバルかどうかだ、というものだ。

私は、そうした発想には、ノーという立場だ。10～20代にしろ、50～60代にしろ、それ以外の世代も当然そうだが、新たな生き方を創造していくしかない、と考えている。そうしたことに関心が向けられていくことを願い、多様な人々が多様な人生創造していくことをコーディネートしつつ、自分自身もそうしたことを模索追求していきたいと思う。

2005年9月8日

## 若者の生き方——その2. 癒し・起業家・人生後半期の人々とのズレと連携

1) 職業上の問題を含めて若者の生き方を考える際、「癒し」への関心(必要)の高まりを視野にいれざるをえない。生き方創造(選択)の場面において、職業生活開始の場面において、多くの若者が精神的不安状況に陥る。そこで、社会に適応できない若者という図式のもとに、若者がいかに「社会適応」「社会復帰」ができるか、という視点から論議が展開する。「ひきこもり」「ニート」というアプローチには、それが典型的にあられる。

私はかねてから、不登校は学校と子どもとのミスマッチングであり、子どもの側だけに変容を迫るのはおかしい。学校自体の変容が求められるし、両者の関係を変えることが課題なのだと主張してきたが、若者の不安状況には同様の問題がある。

むしろ今日の若者の不安状況は、社会の側の問題が主軸であり、それが若者の「不適応」事態を生み出したのである。そこで、「癒し」は若者個人のありようにおける課題だけでなく、社会の「癒し」(というよりも、強制的治療)が必要なのだ。人間自身の自然も含めて自然全体を不当に「変容」してきたし、しようとしている「社会」そのものを自然と連帯する立場から「治療」していくことが必要なのだ。

2) ここで話題からそれるような感覚をもたれるかもしれないが、起業家についてのべよう。庄井良信・中嶋博編著『フィンランドに学ぶ教育と学力』(明石書店2005年)のなかで、フィンランドでは、就学前から起業家精神教育が行なわれているという。そして基礎教育段階で行なわれる「総合的なテーマ学習」の7つの分野の一つとして「参加、民主主義、起業家精神」があげられている。この三つの並びも興味深い。いずれにしる起業家教育というのは、限られたもの対象ではないことに注目したい。日本で起業家というと、ベンチャービジネスといった大企業を小さくしたような企業で、「冒険」的なものをイメージしがちで、小学校就学以前から教える感覚とは距離が大きい。就学以前から教えるというイメージだと、だれもが起業家になる可能性をもっているという、親しさを感じるイメージである。一人でフリーで働くイメージに近いかもしれない。せいぜい数人が集まって事業を起こすというイメージなのだろう。

そういうことでいうと、沖縄にはそうした人々がたくさんいそう。那覇の国際通りで、そうした若者の動きを支援するために、空き店舗を活用して、10くらいのミニショップが開かれていたが、それもそうだろう。コンピュータ・健康食品・ブライダル演出・装飾小物製造販売などと多様な店が並んでいた。それらは、スロービジネスとかスローワークのイメージとも近いだろう。考えてみたら、私もそうしたものの一人となる。そんな仕事観はもっと広がってもいいだろう。

3) 以上述べてきたことは、私がいつてきたストレーターとは異なる生き方の創造であり、すでに若者のなかにそうした志向をもって歩みだしている人が(なかには意図的選択というよりも、結果的にそうなってしまった感覚の人も多いだろうが)、一定程度でてきており、今後さらに増えていくことだろう。

そうした若者に対して、人生後半期に入りつつある親世代は、かなりの不安感を抱く。そこに依拠して、フ

リーター叩きが生まれているとっていいかもしれない。だが、人生後半期にいる人々のなかにも、新たな生き方を追求している人・追求せざるをえない人はかなりいる。私が近年いつてきたい方をすると、現在人生後半期にいる人々がそのなかで生きてきた1960年代型生き方・企業社会型生き方とは異なるものを追求しているのだ。

その意味では、人生後半期にいる人々のなかには、若者の新たな生き方に対して大きなズレを感じ、それを批判する人と、若者の新たな創造に共感するものを持ち、連携しようとする人の双方がいるのである。というよりも、同じ人のなかにその双方を持ちあわせ、葛藤している人がいるのである。そしてそれは広がりつつあるとっていいかもしれない。

しかし、現時点では、旧来の企業社会型生き方をより競争的に展開し、それに勝ち抜くことを求める生き方、「景気回復」といったキャッチフレーズに象徴的なように、大量消費を前提にした生き方の継続を求める動き、そしてそれに勝ち抜く「勝ち組」を正当とする考え方が、新自由主義の浸透のなかで、かなり強硬に存在している。というよりも、それがなお支配的傾向ですらある。

こうした事態をいかに越えていくか、そうした「社会」の「癒し」の課題と若者の生き方創造とは並行して進行している課題なのだ。



2006年3月24日

## 競争・格差社会での「人生選択」から「人生創造」への転換を

3月20日の大阪高生研での集まりで、拙著「「ストレーター」秩序を超えて、若者の〈生き方〉を創る教育へ向かうには」（2005中京大学『教養論叢』掲載）について、討論していただいた。その討論のなかで、「90年代後半から続いてきた若者の生き方の大転換における過渡期的状況に、ここ数年のうちになんらかの収斂状況が生まれてくると予測する」と書いた拙著に対して、どのように収斂するのか、と問われた。

その問いには、現段階では明瞭に答える状況にはないがゆえに、このように表現したのであるが、その収斂に対しての問題提起は可能であろう。その点についていくつか述べておこう。

1) ストレーター秩序の崩れが進行し、その秩序のなかを進む、いわゆる「勝ち組」人数はこれまでも50%にはるかに届かないものであったが、それが激減していくだろう。多少なりとも安定的な職業に就く平均的年齢は、かつての10代末から20代の状況が、今日では、20代から30代へと以降してきているが、それが30代へと移行していくだろう。

2) そうしたなかで、若者たちは受動的な職業選択ではなく、職業定着を創造的に追求していくことになる。

3) そのなかで、「いい点数さえとれば」型の進路指導ではなく、当事者の進路創造を促進する進路指導へとシフトせざるをえないだろう。

こんなことをふまえると、これまでのストレーター秩序のなかでの思考を続けていると、競争格差秩序のなかで、ストレーターを続ける勝ち組と、フリーター・ニート化におこまれる「負け組」との間の格差的選択においやられる状況がひろがっていくであろう。その両者とも、「職業にあわせた生活・人生」に追いやられている。教育にひきつけていうと、「ツメコミ型」人生である。よって、その状況をいかに突破していくかを焦点としていきたい。

それは、この「勝ち組」「負け組」以外の道を創造することである。「生活・人生にあわせた職業」を追求することである。人生創造の一環としての職業創造である。そのタイプにはいろいろあろう。数的にはかなりの量を占める企業の雇用者にあっても、自分の生活・人生にあわせて勤務する志向性を強める人々である。さらに、自営業・協同的な仕事などでもその傾向が強まろう。「ロハス」とよばれる方々も当然ここに入るだろう。

「ツメコミ型」人生に対していうと、「ワークショップ型人生」とでもいえようか。

この三つのタイプの三すくみ状況がひろがっていくつつ、三つの比率が大きく変化していくだろう。過去については独断的な推理で、将来については願望的な推理で、比率をならべてみよう。「他」というのは、流動的な人・無業者などである。

	「勝ち組」人生	「負け組」人生	他	創造型人生
バブル以前	両者「未分化」50%		45%	数%以下
現状	30%	20%	40%	10%
10~20年後	10%	15%	35%	40%

生徒の自主的活動を促進する志向性を強くもった参加者が多いせいか、「普通」の高校教師とはかなり異なりそうだ。貼りだしたものをみながら、「フリーター」「ストレーター」問題など、進路指導・高校生のこれからの生き方にかかわって論議をすすめていった。

2007年2月8日

## 児美川孝一郎「若者とアイデンティティ」法政大学出版局2006年を読む

タイトルの内容が大変よく整理されて提起されているので、わかりやすい書籍である。法政大学のキャリアデザイン学部関連で、学生たちにも読ませる意図があるために読みやすい形にしたのであろうが、それでも今日の学生たちは少々手間取るかもしれない。しかし、私にとっては、このテーマについて学ぶうえで大変都合のいいものであった。内容的にも共感するところ、刺激をうけるところが多い本である。それだけに逆に、私とは把握やアプローチが異なる点にも興味が注がれる。そんな点を中心に箇条書き風にコメントしよう。

### 1) 「標準的ライフコースの崩壊」と沖縄をめぐる

90年代からはじまる「学校から雇用への移行」における「新規学卒就職」の解体が「標準的ライフコース」を崩壊させてきた点は、誰しも一致する把握であり、ただ、そのことを沖縄に即して考えてみると、単純ではない。本書では、注にそのことをほのめかず叙述、また若者のなかでの「地元志向」の高まりにかかわる叙述などにも、そのことにかかわりがあるが、本格的には触れていない。そして、このことは沖縄関係者のなかでの指摘があるが、広くは知られていない。そこで、私なりに考えていることを少し書いておこう。

「標準ライフコース」、私流にいうと、「ストレーター秩序」は、沖縄では若者人口の10%以内であったなら、「復帰」期ころより、少しはその様相がみえていたが、大衆的な広がりをもって、そのことに「関心」がもたれるようになったのは、80年代後半である。しかし、大衆的な規模で「成立」したかという、そうでもない。多少は広がった程度であり、今も広がりつつあるといったほうがいいかもしれない。

だから「標準的ライフコースの崩壊」とはいいいやがない。それは、若者だけでなく、大人たちにとっても同様のことである。安定的な終身雇用を保障する企業社会というべきものの広がり、それほどのものでない状態が続いてきたのである。人口のかなり多数を占める人々が、安定的な終身雇用とは異なる形で働いてきた。そしてそうした状態に対応した仕事をめぐる状況があったのである。たとえば、失業・転職を支え、あるいは(とつても小さな)起業を支えるような日常的関係、隣近所関係が長く存在してきたのである。

そして注目すべきは、近年、本土から、とくに都市から大量の若者が沖縄に移住し、仕事をしているという事実である。沖縄県内・本土からの移住の若者を含めて、そうした人々の収入は高くない。格差社会ということであると、明らかに下の層の収入である。アルバイトにしても、時給600円少々が普通であり、正規雇用にしても、時給換算すると、1000円内外が結構多い。金額的にみると、本土都市生活者からみれば、それでよくやっていけるなあ、という感想をもつかもしい。

こうした状況にある沖縄が例外的なのか、それとも本土でも「田舎」では、それに類した状況があるのか、そのあたりも知りたいところである。ちなみに、この本にでてくる事例などは東京近辺が圧倒的であり、読んでいた感じとしては「大都市」的ストーリーを強く印象づけられた。

こうした問題をいかに解いていけばよいのか、実は例外的状況でありながら、注目すべき問題がありはしないか、と私は考えている。起業率も廃業率も圧倒的に高い沖縄では、本土都市におけるベンチャー起業とは異なった形で、こぢんまりとした形にせよ、自分たちの働きがい追求しながら、仕事起こしをしている事例を、

私近辺にも見ることができる。また、スロービジネスとかスローライフとかの考えをもって展開している人もある。とはいっても、沖縄の労働時間が男女ともに全国平均をはるかに上回っている状況をも見ておく必要がある。

「標準的なライフコース」「ストレーター秩序」の崩壊に対して、どのような視点から問題を考えるか、ということは重要である。企業社会的な働き方、ワーカホリックな働き方とは異なるありようへの模索という視点も不可欠なように私は思う。

## 2) 「青年期の延長」「ポスト青年期」論と、「大人像」の問題

青年期と成人期の間の時期をどう考えるかという問題をめぐって、著者は次のように述べる。

――「青年期の延長」論と「ポスト青年期」論のどちらにたとうとも、そのいずれもが、「成人期」の規範性を暗黙の前提として、かくあるべき「成人期」にいままだ至らない状態として、引き延ばされた、あるいはポスト「青年期」を論じているという共通性をもっている。(中略)「青年期」の引き延ばしや「青年期」後の新しいライフステージが出現したと捉えるよりも、ひょっとしたら、これまでのような「成人期」の規範性そのものが崩れはじめた状況として認識すべきことなのかもしれないわけである。若者たちの「大人への移行」プロセスが長期化・複雑化・不安定化しているということは、若者たちの到達する大人像そのものに、もはや普遍的なモデルを想定することができなくなったという事態の登場を意味している。P 48～9――

今日の事態は、若者だけでなく、大人自身がそれまでの生き方を変更創造していくことが求められることに特徴があることを繰り返し述べてきた私にとって、大変共感できる叙述である。大人自身が、これまでの標準のライフコースから外れるのが一般化しつつあり、そのなかで、新たな生き方を創造する作業に入ることが広がりつつあり、その点では若者たちと共通する課題に向き合っていると捉えるのである。そしてそれは「標準化」できるようなものとはかなり状況が異なると私は考えているのである。

## 3) 学校から「“降りる”という選択肢の不在」をめぐって

著者は、「意識のうえでの“学校ばなれ”はすすんでいるし、学校的な価値や秩序を突き放して見ることは、彼/彼女らにもできる。にもかかわらず、“降りたくても、降りられない”。これが、今日の「学校と若者」をめぐる心象風景なのではないか」と述べ、“降り”ないでどう対応しているかについて述べるが、そのなかにはたとえば「それ以上の“傷口”を広げないための孤独な“闘い”に挑む。つまり、学校との「折り合い」をうまくつけながら、「閉塞感」の漂う「終わりなき日常」をなんとかやり過ごすのではあるまいか」P 99 というものたちがいることを述べる。

だけど、かなりの程度“降り”てしまったり、それとは異なる歩み方をしはじめる若者が、実際にいるのではないか、とも思う。それは20歳前後ではまだ鮮明ではないが、20代中頃になると、(とつても小さい)共同起業とか、スローライフとか、癒しの追求とかという形で多様な試行錯誤・創造をしている若者が、かなり存在しているのではないか。少なくとも私の周辺にはそうした若者が目につく。

## 4) 友だちをめぐって、こんな風にかかれてる。

-----大人世代の感覚としては、「友だち」と言えば、遠慮や気兼ねをする必要がなく、なんでも話せるし、個人的な相談ごとなどもできる仲間といった存在をイメージするだろう。友だちだからこそ、妙な配慮や気遣いは不要であるといった感覚が、そこにはあるはずである。しかし、今日の若者たちにとって、友だちとは、まさにその逆の存在である。友だちだからこそ、その相手には細心の「気遣い」をする必要があるし、友だちが相手だからこそ、その場の“ノリ”や“空気”をみ出すようなヘマをやるわけには絶対いかないのである。P 1 1 2-----

私の「感覚」としては、この叙述は理解できる。ただ、大人世代における友だち関係の把握は、「感覚」としてはそうであるにしても、事実としてはそうなのだろうか、という疑問はある。大人世代にしても、実際には、若者世代にある「気遣い」と同じものがあつたのではなかろうか。もしかすると、「配慮や気兼ねが不要」な場合に、一方が他方に事実上「従っていた」という関係の場合もかなりあるのではなかろうか。無論、世代が新しくなるにつれて、実際の行動などに比して「気遣い」の方に過重な関心が向く傾向が増しているとはいえようが。

この問題をめぐって「近づきたいけど、近づきすぎると傷つけあうというヤマアラシのジレンマ」の事例がだされ、適切な距離をとることに関心がむけられている。私は、これは距離の問題でもあるが、異質協同の関係を築くことの問題として把握する。

この問題をめぐって、次のような叙述もみられる。

-----かつては、友人と言え、若者たちにとっての自立の根拠地であつた。親や教師といった大人の価値観や考え方、大人が示す行為・行動の指針に従っていた、あるいは従わざるをえなかつた“古い自分”を卒業し、“新しい自分”をつくり上げていく自立のプロセスは、長くて不安定で困難な道のりである。だからこそ、そこに随伴してくれる同世代の、同じ発達課題を抱えた仲間の存在は貴重であり、そうした仲間との親密な関係づくりが、若者たちにとっては無くてはならない成長の糧でもあつた。アイデンティティの問題と言えば、大人たちの承認に根拠をおいた「自己同一性」の感覚から、たとえ大人社会の規範からは逸脱しようとも、同世代の仲間からの承認をこそ拠点とする自己認識への転換が、思春期・青年期の特徴でもあり、発達課題でもあつたわけである。今、こうした意味での親密な関係づくりが、困難に直面している。しかし、だからといって、若者たちは、友だちや親密な仲間を求めているわけではないわけではない。むしろ、熱病にとりつかれたように希求している。にわかかわらず、そこに待ち受けるのが、自分を全面的にさらけ出せるわけではない、綿密な配慮と「気遣い」あいが必要とする世界なのである。・・・P 1 1 7-----

「かつては」といってなされた叙述は、いわば図式化・標準化されたものであり、今日はそれが困難になっているという表現であるが、ここでも、私は「かつて」を標準として把握することが適切なのかという疑問に加えて、事実としてそうだったのだろうか、そして今日をその「標準」の実現の困難という把握でいいのだろうか、という疑問をもつ。「かつて」は、「親や教師といった大人の価値観や考え方、大人が示す行為・行動の指針」に従う“古い自分”からの卒業であつたとしても、それは社会的なものに従う流れであつたのであり、その点では、「困難」といわれる今日のほうが、「純粋な」友だち関係のなかでおしすすめざるをえないという困難さにストレートに出会うという特質があるのではないか、という把握も可能なのではなかろうか。

5) 承認欲求をめぐって、次のように叙述されている。

———若者たちが、“人から認められたい”“承認されたい”という欲求を強く持つようになってきていること、そして、そうした承認欲求を満たしてくれる存在は、現在の生活環境においては、さしあたり周囲にいる友だち（仲間）を除いてほかにはないという事情が、大きな比重を占めているのは確かではなかろうか。P 114———

この承認欲求にかかわっては、承認する他者の側の承認のありようをめぐっても検討する必要があるのではなかろうか。私達の周辺の人間関係において、他者に対する承認を日常的に行うことに、人々が長けていない状況がありはしないだろうか。承認が行われるとすると、競争的關係における位置によるものももっとも多く、それは逆に否定的承認を大量にもちこみ、それを避ける態度さえ生み出している。また、承認をめぐる言動が、相手を傷つけやすいという体験が多くあるがゆえに、承認が大変「一般的抽象的」なものになって、相手に響かず、相手の承認欲求を満足させるものが大変少ないこともありはしないだろうか。

もう10年以上前になるが、非常勤でしていた愛知教育大学の授業の最後に、受講生相互が「～～さんのステキなところ」を順に書いていく活動をおこなったが、最後に、自分のことが書かれた紙を受け取って読んで感想を話してもらった時、かなりの比率の学生が、喜びで泣き出してしまったことに驚かされたことがある。友だちを含め、同世代の人たちからほめてもらった体験がほとんどない、というのである。

このように、ほめるという体験が大変乏しい状況があるようで、私はそれ以降、半年間の授業の終了時点で、他者評価の活動をおこない、一人の人について、5～10人の人に「あなたのこんなところがステキです。こんな点について期待します」といったことを具体的に書いてもらう活動をしている。その人の弱点に触れる際は、その改善策を提示する形で期待を書くという形をとってもらっている。このような他者評価と絡み合わせて自己評価を書いてもらう。それらのものはすべて本人が持ち帰って保存してもらうことにしている。

承認欲求を、具体的な活動と結びつけて具体化する場面が大変少なくなっているだけに、「心理」的に「気遣い」がふくらんでいる状況がありはしないのか。だから、大切なことは、多くの人が、他者に対して具体的な活動に即した具体的な承認活動を広汎に展開し、そのことに長けることではないだろうか。そうした承認活動が蓄積していくことが、実践的な意味で、教育的な意味で重要なのではないだろうか。これは友だち関係だけでなく、親子関係、教師生徒関係を含む多様な関係において言えることと思う。

6) 管理職志向よりも専門職志向の高まりをめぐっての次のような叙述には、私もうなづけるところが多い。

———高校生たちのあいだでは、「管理職」志向が減少し、「専門職」志向が増加してきており、その割合はまた、高卒志向のものよりも短大・専門学校志向、さらには大卒志向の者のほうが一貫して高くなっている P 129

若者たちの職業志向の基準は、職業的威信や経済的条件といったものから、「自己実現」志向へと変化してきている。P 131———

私は、このことの中かに、若者たちの、スローライフ・スロービジネスをめざし、地球と自己との共生を追求する新たな生き方へのかれらなりの表現をみる。そしてそれは、若者たちだけでなく、人生後半期にいるも

のたちも含めて大人たちにもあらわれてきている志向とみる。少なくとも、私の近辺に生きる人たちの多くに感じるものである。それは、企業社会に距離をおいた生き方の追求でもある。若者もそうだが、大人たちは、それらがそれまでの生き方からの転換を含むものであるがゆえに、若者とは異なった形の困難さがつきまとうことも見ておきたい。

7) “新しい働き方”をめぐって、著者は次のように述べる。

―――若者たちの多くは、みずからの「希望」が「現実」の壁に跳ね返されてしまう苦い経験をせざるをえない。そこから、ある者は「希望」そのものを断念し、ある者は「現実」と折り合いをつけつつ、「希望」をそっと手直しし、またある者は「希望」にこだわり続けるがゆえに、より困難な「現実」をみずから引き受けていく。現実が、目の前の所与の「現実」から選ぶものでしかない限りは、若者たちのこうした苦渋の選択は、ほかに出口を見つけることはできない。P 135―――

書かれる通りの現実があるわけだが、「希望」と「現実」とを「折り合い」をつけつつ、あるいは両者をからませつつ、「現実的な希望」へと発展させていく営み、あるいは「希望的な現実」へと発展させていく営みを若者（若者に限らず、人生後半期の大人も含めて）のなかにいかに発展させていくかが、今日の課題であると考え。そうした希望と期待をもつ若者・大人が、沖縄には、あるいは沖縄への移住者には、大変目につく。こうした営みを促進するありようを追求することが、私の現在の一つのテーマである。その点では、＜補論9＞に書かれている「若者たちの地元志向」の日本全体での高まりには注目しておきたい。

2008年11月17日

## 偏差値依存型進路選択と子どもの将来希望・目標形成の弱さ

時々、子どもの教育相談を受けることがある。その相談内容の一つとして進路選択がある。

数年前、親子共々の相談を受けたことがある。その時、子ども、つまり若者側は自己の将来像を鮮明もっていて、学習したいことに即して大学選択を考えていた。複数の大学に合格し、どちらを選ぶかということでの相談であったが、若者の考えは、偏差値にもとづく「大学の格付け」とは逆であった。

私は、その若者の選択を支持した。それは、大学についてもよく調べるなど、10代後半としてはしっかりと考えられている選択であったからである。もっとも、その大学に幻想をもつてはならないこと。入学後、自分なりの希望学習内容を発展させるために、その大学を活用するという気構え・姿勢が大切であることを話した。

最近、その若者が自分なりの目標を発展させて、大学卒業後の進路もすでに確定させたことを聞いた。

こうした積極的な動きを展開する若者は、最近では多くない。沖縄についていうと、1970年代や80年代前半とは様変わりだ。自己の将来像よりも、まずは偏差値レベルへの関心を先行させ、それにもとづいて将来像を「決める」というよりも、「決まってしまう」タイプが多い。これを私は「偏差値依存型」進路選択と名付ける。

大学卒業後にもそんな事態がみられる。就職してみて、自分なりに考えて、その選択があっていないように思いはじめ、退職後、自己の将来像を、ようやく自分なりに考えるという事例が結構多い。

なぜだろうか。1980年代半ばを転機に、沖縄では、進学・受験体制が「画期的に」整備された。本土では1970年代といえよう。それと並行して、高校の序列が明確になり、象徴的にいうと、高校に特別進学クラスが設置され、受験専門校が激増する。

そして、それに向けて、中学時代、さらには小学校時代にいたるまで、学習塾が一般化する。そうした高校ならびに学習塾は、わかりやすくいうと、そろばん塾のように、進度が明瞭に数値化されてみえやすいものである。子どもたちはその進度にそって学習するスタイルになる。そうしたものに似たものとして、スポーツ競技の多くがある。

そうしたことが整備されてきて、圧倒的多数の子ども・若者がそのなかを歩むようになったのが、ここ20～30年の特徴なのだ。

それに比べて、子どもの将来像形成は後回しになる。偏差値があつて、それにもとづいて進路選択をすることになってきたのだ。将来希望にもとづく進路選択があつて、その進路を歩むために必要な「偏差値」を獲得するというわけではないのだ。

加えて、親の働く姿を見るなど、将来像形成を育む条件は乏しくなっている。そして、学校や塾でも、そうした将来像形成にかかる比率ははなはだ低下している。結果的に将来希望にもとづく進路について考えること



は20代へと先送りされる。人によっては20代後半から30代へと先送りされているのだ。

私は、5年前まで中京大学で、主として体育学部学生を対象に教えてきたが、そのなかで、スポーツで「栄光の道」を歩んで体育学部に入学してきた学生が、全国のスポーツエリートの中なかでは、ほとんどが高校時代までの「栄光」の道以外を選択せざるをえないこと、かりにスポーツエリートであっても、そのスポーツでは「生活」していけないことに気づき、卒業近くになって、はじめて将来進路を考え、卒業後にもう一度専門学校に入る事例をたくさん見てきた。

同じことは、受験進学校出身者の大学生活ぶりにもいえ、将来選択を大学卒業近くになってはじめて考えるケースが増大している。

それは受験進学校で、将来希望にもとづく進路選択についての指導が希薄になっていることの反映である。受験進学校には、将来希望にもとづく進路選択を促進するために、生徒たちの多様な活動を奨励し、生徒自身の試行錯誤的な探求を重視するタイプの伝統的學校があるが、そうした学校の占める比重がどんどん低下してきている。新興受験校にはそうしたタイプは少ないし、沖縄の受験校には、このタイプはなきに等しい。

そのため、各地の大学では、大学教育に対応できない学生たちに苦慮している。与えられたものしか学習せず、自分なりに問題意識をもって取り組むという姿勢が弱い学生をどうするかは、今日の大学教育の重要なテーマになっている。

少なくとも13、14歳以降は、自分の考え・決意でもって、学習する時代である。無論、それに失敗はある。しかし試行錯誤・失敗をくりかえしながら、自分なりの考え・決意が固まり、その考え・決意をもとに設定された目標をもとに、必要な受験学習をするという「当たり前」の思考方法を育てることの重要性を改めて確認してほしい。

こうした姿勢を、子ども・若者だけでなく、学校教師、親にももってほしいと思う。

2011年12月25日

## 工業化時代のライフコース≠ストレターコース？ 宮本本9

※ 宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイル」（放送大学教育振興会2011年刊）は、私の強い興味を引き付けた本で、ブログの長期連載で紹介コメントした。そのなかの若者の人生創造にかかわる記事を紹介しよう。

「第4章 少子高齢社会のライフコース」には、私がここ10年近く論じてきた「ストレターコースの問題」と同様の指摘が登場する。たとえば、以下のように、である。

女性の場合であるが、

「結婚、子どもの誕生、それに続く子どもの教育期、その後の結婚など、従来ではライフコース上の標準的なイベントとされてきたものが、これまでどおりにいくとはいえなくなり、しかも、ライフコースの標準的なパターンがあるということも一概にいえなくなってきた。さらに、これより若い世代においては、結婚しないこと、子どもを持たないこと、離婚することなどが、より一般化することが予想される。」P77

私が言うストレターコースは、主として子ども・若者の将来創造・選択にかかわって述べるものだが、近年では、人生全般にわたって、標準コースに従うというのではなく、人生創造する動きが強まっている。その動きをより豊かに展開するための主張を、私は繰り返してきた。

ところで、本書では、それまでの標準的なライフコースは、「工業化時代のライフコース」と表現される。

「工業化社会に入ると、身分的な制約が取り払われ自由度が高まるとともに工業化社会に特有のライフコース・パターンが確立した。学校への入学、卒業、就職、結婚、親になること、子どもの教育、退職などのイベントを順次通過していくライフコースが、ライフコース・パターンとして標準化するが、それが日本で確立したのは1960年代で、その大枠は欧米諸国にライフコース・パターンの変化が生じた後も維持され、1990年代の中盤まで続いた。（中略）

工業化時代の生活のあり方を枠付けた特徴的な要素がある。第1は失業率が低いこと（完全雇用）、第2は結婚適齢期の存在と高い婚姻率、第3は結婚後の明確な性別役割分業、第4は雇用の長期安定性（終身雇用制）、第5は老齢年金制度による老後保障などである。ただし、終身雇用制や老齢年金制度が生活保障の機能を果たしたのは大企業の世界であり、そこから外れる人々は、家族や親族の私的保障が補完していたのである。（中略）

このような工業化時代特有のライフコース・パターンをフォード型ライフコースと呼ぶこともある。フォード型の企画化された製品の大量生産様式を特長とする工業化時代に特有のライフコースを指している。」

P79

こうしたライフコースを、本書のように「工業化時代に特有のライフコース」、「フォード型ライフコ

ース」とよぶこともできるが、ほかに、引用文を使って、「大企業の世界」のライフコース、『大量生産様式』のライフコース、ともよべそうだし、あるいは「産業社会」のライフコースという言葉も登場しそうである。わたしのようには、「ストレーター型」ないしは「レール型」のライフコースという表現も認められるだろう。

その命名は、このライフコースの前後の時代との区切りの仕方が変わってくるだろう。とくに、現代状況とのかかわりでいうと、後の時代との関わり・違いが重要になるろう。

そのあたりは、次回にまわそう。

2011年12月29日

## 「ライフコースの個人化」と人生創造 宮本本10

前回話題にした「工業化時代のライフコース」について、次のように指摘されている。

「1970年代に入ると、欧米先進諸国では、従来のライフコース・パターンから外れる現象が見られるようになった。標準的ライフコース・パターンが弱体化し、教育、就業、結婚・家族形成、引退等の時機や期間、ライフ・イベントを経験するかしないかなどに多様性が見られるようになったのである。」 P79

欧米先進諸国では弱体化し、多様性が見られるようになったのに対して、日本がその傾向を見せ広がり始めるのは、かなり遅い。それはなぜだろうか。

「工業化」からの脱却の遅さという指摘がでてきそうだが、それにとどまらないのではなかろうか。その一つに、標準化されたものの強力さがありはしないだろうか。学校、および学校から職場への移行のコースのなかで形成されたストレーターコースが強力であり、今なおかなりの影響力を持っていることがあるといえよう。

また、次の引用も言及しているが、多様化する「ライフコース・パターン」は個人の創造として展開されるものだが、それでも人間関係・集団の中での展開である。その人間関係・集団のなかでの展開が弱く、あくまでも個人として展開され、それに成功するのは「強い個人」であって、「弱い個人」がそれを展開しようとする、孤立へと向かう、という状況があることとかかわりもあろう。

それゆえに、「弱い個人」は、なかなか踏み出せない。それを支える物的基盤が弱いのだ。こうして、個人化は自主的なものというより強制されて発生している傾向を強める。

「2000年代に入ると、若年層において、非正規・非典型雇用に従事する人々、離職・転職する人々が急増した。非婚化も加速化した。このようにして、ライフコース・パターンの多様化が本格的に始まったのである。

ライフコースに対する社会的関心が高まるのは、流動性の高い社会構造へと変わったことが背景にあった。例えば、家族集団のメンバーとしての人生という観念から脱して、「家族とは別に、自分自身の人生がある」と感じる人が登場し始めたのは、ポスト工業社会の段階に入った1980年代からである。そこに、人生をライフコースとして見ようとする視点（ライフコース・パースペクティブ）が生まれるが、そこには、「人生は自分自身が主体的に形成するもの」、という人生観の転換があった。家族集団としての周期的律動（家族周期またはファミリー・サイクル）から、個人としてのライフコースが浮上することを、ライフコースの個人化という。

（中略）

人々が、自分自身のライフコースの目標を設定し、その目標にのっとって特定の時期に特定の役割を選択していく行為を、ライフコース・スケジューリングという。このような行為は、いかなる時代・状況においても見られるものであるが、人生を主体的に設計していこうとする志向が高まり、ライフコース・スケジューリングが現実化したのが現代の特徴となっている（中略）。

人々のライフコースが外部の諸条件に規定され、自律性を持つことが難しかった特代を脱して、自分自身の選択可能性が高まったことは、現代の特徴である。ライフステージや生活領域の境界があいまいになり、人生

の道筋の多様性が増したが、同時に人生行路が不明確あるいは予測困難な状況になっている。しかも、個人の選択にゆだねられているだけ、失敗も個人の責任とされる傾向が強まっている。」P79~80

ここにあるように、「失敗も個人の責任とされる傾向」が強いし、「非正規・非典型雇用」「離職・転職」という不本意な形で「ライフコースの個人化」が進行しているのが、日本の特質といえないだろうか。

さらに、工業化そのものが遅れた、ないしは実現しきれていない沖縄では、物質的基盤がないままに、1980年代ごろから「工業化時代のライフコース」だけが、学校におけるストレーターコースとして導入されてくる。当時はまだ「依存型」産業が圧倒しており、雇用は前工業時代の体質を残しており、それだけに「出稼ぎ型」雇用、つまり県外の大都市での就職という形が多くなる。

そうした人生創造を主体的に展開する基盤が弱いまま、近年の「非正規雇用」の時代に突入している。

そうした中で、「ライフコースの個人化」のひとつであろう家族形成を例にとってみても、一方では、10代ないしは20才前後での早期スタート、他方では晩婚型ないしは非家族形成型という二分化が進行している。こうして、「ライフコースの個人化」が外圧的に登場し、多様化というよりも不安定化という様相が強く、人生創造という形が容易には実現しない状況が見られる。これは、沖縄に限らず、全国各地、特に経済基盤の弱い地域でよく見られる状況である。

2012年1月3日

## ライフコース前半期の変化と人生創造 宮本本11

ライフコース前半期について、宮本さんは次のように書いている。

「その一方で、消費社会の拡大に伴い、子どもが消費市場に参入する時期はずっと早くなっている。金銭との関係、性体験、商業市場との接触に関して、大人と子どもの境界はなくなりつつある。むしろ、情報機器を操る力は子どもたちの方が勝るようになる。このように、子ども期と青年期の境界、青年期と成人期の境界のどちらもあいまいになり、子ども期、青年期、成人期の区分を、単一の尺度で測ることは難しくなっている。特に結婚制度が流動化し、「結婚」や「家族形成」が必ずしも規範的な出来事とはみなされなくなっているため、未婚者は半人前、既婚者は一人前と区別して、ライフコースのステージを分けることができにくい状況になっている。

このような理由から、「標準的なライフコース」の設定は難しくなっているのである。」 P82

この記述のあと、ライフコース後半期が描かれるのだが、私がこの10年間書いてきた「人生の後半期」という区切り方と共通なものを感じる。

ここにあるように、従来の「境界」は、社会的にはっきりしなくなりつつある。ではそれは、個人個人によって異なるというべきなのか。そうでもなさそうだ。個人においても境界は不鮮明であり、いつ「成人」になったのかを確定するのは難しい。比較的容易に見える収入面での区切りでさえ、不安定就業の拡大のなかで難しい。区切りになる社会的行事でさえ、個人的に営まれる色彩が濃くなっている。産育行事が社会的に行われる時代は、もう随分以前の話になっている。

だから、「標準的なライフコース」の設定は難しくなっている」と書かれている通りである。だが、「ライフコース」は、事実として存在する。そのライフコースを、当事者自身が、彼／彼女とつながる人々との関係の中で、どのように選択創造していくのか、あるいはまたコースにかかわる意思の決断・表明を行うのか、といった課題は依然として残る、というか、それを積極的に行うようなあり方を追求したい。それを私は「人生創造」という言葉で表現してきた。

## 52. 「標準」とは異なる生き方の探求

2005年7月29日

新しい生き方基準をつくる会「フツーを生きぬく進路術17歳編」（2005年青木書店）を読む

読者を17歳に想定した実際的な書物である。進学編は、大学・専門学校・短大・職業訓練校について、普通の進路指導では示されないリアルな情報、ないしは情報入手方法を示している。なんといっても職業訓練校を、しかも絶賛でとりあげたことが特色である。

仕事編は、職業選択というよりも、職業選択にかかわって生じやすい錯覚・トラブルへの防止・対処策が具体的に論じられている点に特色がある。「労使紛争」に労働者個人が対応する方法を詳しくわかりやすく論じてある。

そうした意味では、「新しい生き方基準」全般というよりも、かなり焦点化した書物である。そして、バラ色に描いたり、フリーター叩きのなとんとは全く異なり、17歳が今後の学業・職業生活をつくっていくうえで、リアルなアドバイスがある点で、なかなかの書物である。そこで、私なりの感想をいくつか。

進学編は、「中等後教育」機関について、17歳や、その親、とくにストレーター秩序の強い影響下にあるものがもちがちな「幻想」をうちくたくリアルな情報を寄せている。「成績がよくても、そこそこでも、職業に結びつく学校を選ぶ。力をつけることのできる学校を選ぶ」ことを提示しているが、その意味で、私がかねてからいっていた「バブル大学における教育の空洞状況」をリアルについている。果たして4年間に400万円以上支払って在学するに足る大学は果たしてどれくらいあるのだろうか、という問いかけに通じる。

仕事編におけるトラブル対処の基本は労働組合にかけこむである。そうしたありようの現実性はそう大きくないのであろうが、その方向を追求することは大切だ、と思う。非常勤講師を中心にしてフリーターの生活をしている私自身にも参考になることはかなりある。

さて、もっとも大きく論議しなくてはならないのは、書籍タイトル・著者名も示唆しているが、「はじめに」に述べられている「よりマシな学校、よりマシな仕事を選び、よりマシに働くための、新しい基準を紹介するというのがこの本の目的です」といわれていることである。

旧来のストレーター秩序において、「基準」は明瞭に存在した。そして、その「基準」に沿えば、なんらかの「安定」が得られるものがかなりの数にのぼるのであった。しかし、その対象をごく少数の超ブランド大学卒業者に限定することで、ストレーター秩序の「基準」が事実上崩壊したにもかかわらず、いまだ圧倒的に多くの人々はそれに影響されている。フリーター叩きはその延長線上にある。

そのなかで、旧来の「基準」の崩壊を明確にしつ、それとは異なる生きかたを提示することは重要な課題である。それについてのアプローチは二つある。一つは旧来の「基準」とは異なるものを提出すること、もう一

つは「基準」そのものを否定し、人々自らが多様な生きかたを創造することこそが必要だと主張する。このことで、ほぼ10年前に、口頭ではあるが、後藤道夫さんと話し合ったことが思い出される。後藤さんは前者で、私は後者である。そして、本書は前者である。

私は「基準」をたてること自体に疑問をもち、そうではなく、多様な生きかたがあり、それを奨励することが重要であり、生きかたは人々の創造課題であるとする。だから「基準」をたてることに否定的であるのだが、それでも「基準」をたてようとする方々がどのように「基準」をたてるのかには関心がある。

しかし、本書はその「基準」について、先に引用した「はじめに」の個所の「よりマシな」の表現で言及しているだけで、直接述べた個所は他にはない。

そこで、現実的な17歳を対象に語る形をとっているのも、そこを手掛かりに「基準」のイメージを私なりにまとめてみると、旧来の「ストレーター秩序」に深く影響されつつも、それではうまくいかないことに気づいており、それとは「やや異なる」生き方をしていかななくてはと気づきつつある17歳という感じである。だから、超ブランド大学志向はとらないが、大学・短大・専門学校・職業訓練校への進学、ないしは就職を検討している17歳、直接的には高校生をイメージしているといえよう。世代のなかの人口比でいうと、6～8割を対象にするといった感じだろうか。そして、その先、主として都市地域で被雇用者として生きていくことを想定している。

そのなかで、「よりマシな」選択することが「基準」となるのである。「はじめに」をもっと引用すると「特別によい頭脳がなくても、特別にお金持ちじゃなくても、学校や仕事を賢く選んで、仕事のトラブルを賢く解決できれば、すご〜くお金持ちにはなれなくても、お金の面では普通の生活、家族と友だちを大事にして精神的には充実した生活を送ることができます。そういう生活を送る」ということである。

だから、私が強調する、生きかたの「創造」とか、多様な生きかた、というのは、表にでてきていない。現行の社会的枠を前提にして、「よりマシ」な生活を、リアルに獲得するためのワザといったイメージになる。その意味での「リアル」な生きかたを求めるものである。

私は、それはそれで、今日の状況のなかではかなりの有効性はあるとは思ふ。だが、率直に言って物足りない。たとえば、沖縄ではどうなるのだろうか。また、前の随想のスロー・ビジネスなどはどうなるのか。さらに広げて、南北問題の視点からはどうなのか。自然との関係ではどうなるのだろうか。「お金の面では普通の生活」というのは、一体どれくらいをイメージしており、また日常生活の送りかたはどうか。といった問いへとつながっていく。

とはいっても、それらまで視野に入れて論じるのは大変であるから、別の書籍にしようということになるだろうが、それでもなお、ここでいう「よりマシな」「普通の生活」は気になるのである。

それは、なんといっても、まだ「ストレーター秩序」的発想があり、そのなかで、これまでのように超ブランド大学を頂点とし、あるいは超一流企業を頂点とするような秩序ではないが、「よりマシな」「普通」の位置を確保するにはどうすればいいのか、という印象が残るのである。

いずれにしても興味深いし、執筆者たちが、20代後半の大学院生たちであるので、今後の展開を期待するとともに、いつかどこかで論議したいものである。



2006年7月20日

## 佐藤洋作・平塚真樹編著「ニート・フリーターと学力」（明石書店2005年）をきっかけにして考える

「ツンドク」状態にあった同書を読む。書評とか感想とかではなく、同書を読んだことをきっかけにして、今後考えていきたい課題について書くことにする。

同書は、「ニート・フリーター」問題をめぐる政策分析批判において優れている点、現状に対して萌芽的なかたちであるにせよ、多様な創造的実践例を提供している点で学ぶところが多い。

だが、そのことが次の新たな課題を予感させる。つまり、政策推進者側の政策についての検討だけでなく、その「実践」展開がどうなのか、ということの検討と、それに対する創造的な実践が、どのような構想をもってどのような展開していくのか、というオルタナティブな展開の課題群・全体像を明らかにすること、などである。

それはまた、これまでの日本における、とくに学校教育における、子ども・若者の生き方にかかわる実践展開の課題が浮かび上がらせる。ストレーター秩序の崩壊のなかで、改めて学校が、子ども・若者たちの職業も含めての生き方に対して、どのようにコミットしていけるのか。ストレーター秩序が支配したこの40年余りのなかで、生き方にコミットできる歴史的蓄積がきわめて弱い事態をどのように克服していくのか、という課題である。それは、ストレーター秩序に代わるものをどのように提起していくのかということでもある。

この提起にかかわって、注目したのは中西新太郎「青年層の現実に即して社会的自立像を組みかえる」論文である。中西の今後に向けての戦略としては、三つのアプローチを私は読み取った。一つは、福祉国家的施策の要求である。それは、若者たちが「最低限保障と公正な労働・生活基準を具体的にイメージでき正当な要求として意識できること」といった叙述に示される。そして、「筆者は以前に、『非正規・夫婦共働き』という形態をとる社会化コースを、企業社会における労働・生活標準に対し、夫婦の場合おおよそ年収600万円程度の水準に落ち着く第二標準と呼んだことがある」をうけて叙述を展開している。

そして、「フリーターを忌避し非正規就業を想定外におくような進路指導や『職業教育』ではなく、現実によりうる社会化コースとしてこれらをとらえ、その困難を伝えるだけでなく、第二標準を自立可能な水準へと押し上げる展望と道すじとについて、ともに考え検討し合うべきであろう。」などと述べていく。

三つのアプローチのなかの2つ、3つ目は「ニートであれフリーターであれ利用可能な関係資源の動員とストックに関する自前の可能性を『社会経済』『社会文化』として具体化し定着させることの重要性である」と述べられる社会経済の構築、社会文化の構築である。上記の引用に続いて「たとえば、短期間雇用を余儀なくされている派遣労働者のあいだに存在する地域的ネットワークはもろく不安定であっても、自前の相互扶助圏に一つの道をひらく。10代少年少女の友人関係における『地元つながり』や出身学校ネットワークの場合にしても同様であろう。」などと述べられる。私が結社をつくることを強調していることと共振する叙述である。

残念ながら、学校において、子ども・若者たちが結社にかかわる際には、スポーツ・音楽文化に依存していることが多い。しかも、それは結社よりは既存組織への適合を求める要素が強い。それにしてもそうしたもののなかに、あるいはそうしたものの裏に若者たちが結社の萌芽をつくりだし、中西が述べるようなネットワー

クなどを構成している事実に目を向ける必要がある。学校がこうしたことを意識的に追求できることを期待したい。10代が、音楽・スポーツなどを楽しみつつ、かつ人間関係形成を楽しみつつ、そのなかに、自分たちの生き方、社会のありようを語りあうようなものへと発展させていく、学校側のかかわりが期待される。そんな意味では、「〇〇地域を愛する会」「農業に未来はあるか研究会」「フリーターのなかの可能性を探る会」「ニート予備軍連合」などといった結社が、フォーマル・インフォーマルを問わず結成されるような雰囲気・土壌を醸成したい。

そして『社会経済』にかかわって、「ローカル・トラックの潜在的可能性に着目し、可能性を現実性に転化させるためには、生活のリージョナリズム（生活・労働における地域単位の自立構想）をシステムとして維持しうる『社会経済』の実現が不可欠である。そしてこの意味では、社会的自立像くみかえの一環に『社会経済』構想の具体化が含まれていなければならない。たとえば、望ましい働き方を構想する際、労働世界の「適地文化」的な位相を取り出し具体化することによって、個体能力志向のスキームとは異なる仕事像を広げてゆくなどなど。たんなる空想ではなく、今現に若者たちがそこで生きている場所が魅力ある自立像へと結びつけられる「社会経済」のかたちを探求することである。」と述べられる。

この提起などは、私がいう「地域起こし、仕事起こし、人生起こし」と響きあう。それは「人生創造産業」という表現をして、私の地域で地元農業と密着して「起業」している方におおいに共鳴されたことでもある。

そして「学校文化はこの点での蓄積がきわめて浅い点を認めたくえて、『社会経済』構想とかみ合う自立支援教育のあり方を検討すべきだと考える」という中西の主張は私の「<生き方>を創る教育」と重なる。

また『社会文化』にかかわって中西は「個体能力志向スキーム」がというような『社会性』の訓練ではなく、「普通人としての『違いのなさ』や相互依存を不可欠とする『弱さ』に依拠した労働・生活のあり方を標準として確立することが必要となる」なども一連の主張とつながっているが、これについては若干のコメントを後で述べる。

全体として、私の考えていることと響き合っている。無論、私自身の論も含めて、中西論も含めて、こうした戦略が全体として「端緒」的段階にあり、とくに学校教育においては、こうした発想さえ成立していない状況が広くある。こうした状況下で、当の若者たちが孤立し、「内面」へと問題をおいこんでいる状況がある一方で、試行錯誤的に多様な試みが展開している。にもかかわらず、それらを拾い上げ意味づけ、展望あるものへと広げていく営みが稀薄なのである。無論、再三紹介してきた小川嘉範のような取り組み、あるいは本書のなかにみられるいくつかの取り組みがある。そうした動きを一層押し出していく営みが必要である。

中西と私の違いもある。それは恐らく考え方の違いというよりも、アプローチの違い、置かれている状況の違いから生じているものであろう。

一つはさきに触れた「社会性の訓練ではなく」という表現にかかわってである。中西はそれを「個体能力志向スキーム」と結びつけて批判しているので、「社会性の訓練」全般を否定しているとはいきれないが、「社会性の訓練」に対して消極的だとはいえよう。今日、「ソーシャル・スキル」の訓練が、アメリカあたりから導入されたものを含めて広がっているが、そうしたものの多くが「個体能力志向スキーム」と結びついており、中西の批判に該当するとはいえよう。

だが、そうだからといって、「社会性訓練」全般を否定していいのだろうか。「社会性訓練」を否定したからといって、家族や学校、さらに社会的諸団体が行っている「社会性訓練」の広範な事実を無視することはできない。実際、すべての人はそうしたなかで「社会性」を訓練されているのである。ただ、日本の場合は、それが意図的計画的というよりも、生活のなかで、かなり無意識な形で進行しているとはいえる。ヒドゥン・カリキュラム的な展開ともいえよう。それだけにそれを意図的にどう展開するのかが重要な課題である。無論それを「個体能力志向スキーム」ではない形で追求したい。生活指導・集団づくり実践などは、まさにそうしたものであった。

またワークショップスタイルをとって展開しているものには、「個体能力志向スキーム」のなかでのものと、それとは対抗的なものがせめぎあっているのが実際である。そして、残念ながら、日本においては民主主義を志向する人々は、そうしたワークショップ型追求にきわめて未熟であり、時には「反感」さえもって、距離をおいている実情さえある。海外における展開とはかなり異なる状況にあることは、私がワークショップ論でくりかえし述べてきたことである。

中西との一番大きな違いは、中西が「第二標準」という形で「標準」を提起しているのに対し、私は決して「標準」という表現を使用しないことにある。中西の叙述のなかで「標準」を使用している文脈や意図については、私もおおよそ了解できる。だが、中西のような「最低限保障」という意味合いを含んだ文脈での使用の場合を別にして、「標準」という言葉は、多様さを許さず、標準以外の多様なものを例外的事態をみなし、標準に「あわせるべき」という意味合いを濃厚に含むものである。そして、実際、多様な生活のありよう、それを反映した財政生活のありようが存在するのである。とくに、「生き方」をめぐるのは、多様さを豊かに育てることが必要であり、「標準」という用語がそれを抑え込む力学をもって作用することに警戒する必要がある。とくに学校教育は、「標準」ということで、多様さを抑え込む強い力学を持ちつづけてきたことに留意したい。

なお、中西のいう第二標準は、「『非正規・夫婦共働き』という形態をとる社会化コース」と限定して年収600万円としているが、私の居住している地域では、それは随分高額との印象を受け、「非正規」ではなく「正規・夫婦共稼ぎ」である場合さえ、そのラインにいかない事例もみられるほどである。さらに第三世界まで視野を広げると、日本が世界の「上流階級」であることを暗示する数字であろう。だから、600万円というのは、日本の大都市の「第二標準」といえるだろう。さらに、エコロジカルな生き方を提起する人は、もっと異なる考え方をもつだろう。そうした生き方の多様なありようまでも視野に入れて考えていきたい問題である。

2007年3月14日

「よりよい第二標準」へのオルタナティブな教育の課題を追究する、新谷周平「フリーター・ニートと教育の課題」（『教育学研究』第73巻第4号）論文

1) 本論文の摘要として書かれたものにこう書かれている。

「キャリア教育政策や機会平等論から導かれる政策は、計画性や上昇移動を基準とする単一の生き方・働き方のモデルを設定するが、それは過剰な同化とあきらめを介した格差拡大を生じさせる可能性が高い。それとは異なる生き方・働き方のモデルを設定し、そのために必要なスキル・認識枠組みを政策・実践に取り入れる必要がある。」P148

2) こうしたアプローチから「よりよい第二標準」へと向かう「オルタナティブな教育の課題」を提起する論文である。その提起の前に、キャリア教育の現況を次のように批判する。

「キャリア教育の中核に置かれている職場体験学習では、事前学習において、自己理解と職業理解が行われる。一方では、『13歳のハローワーク』にあるような現実にはほとんど見ることのない『多様な』職業が紹介され、他方では、直接出会った職業を思い出して記入することが求められる。（中略）

ここには何重ものウソがある。第一に、現実の職業分布との明らかな齟齬である。現実のほとんどの働き手はサラリーマンであり、その多くは事務であり、営業であり、技能工なのである。あたかも『多様な』職業から選べるような図式は明らかなウソである。第二に、多くの人が職業によって自己実現しているかのように思わせるウソである。その両者の背景として第三に、職業がその待遇・威信などによって構造化されていることが意図的に隠されている。」P152～3

冷徹で鋭い指摘である。

3) こうした教育は、実際には次のような状況をつくり出すという。

「現在の状況は、困難を抱える者にとって、消費文化への接触と労働からの逃走が唯一の抵抗の様式であり、そこにとどまってしまっている。それでは、実存レベルの満足は得られても、経済的・道具的利益には結びつかない。」P154～5

それに対して「若者の実存レベルの抵抗が、経済的・道具的利益に結びつく資源となりうるための教育の課題を示しておきたい」P155とする。

現行のキャリア教育が提示する「働き方のモデルは、（中略）すべての子ども・若者を包摂することができるものではなかった。リアルでないモデルの強調と普及は、一方でそのモデルへの過剰な同化を強い、他方であきらめを生むことで、格差の拡大とその責任の個人化を帰結してしまう。」P155と述べる。

4) そしてこう述べる。

「現代の若者にとっての困難の一つは、生きるモデルが見出せないことである。これまでのように学校に適

応してさえいけば就職先が得られるという見通しが成り立たなくなっている。」 P 1 5 5

その通りであるが、「生きるモデル」が不可欠なものであるかどうかは、問うてみる必要はある。

「そもそもこれまでの世代のどれだけの人が計画的なモデルで生きてきただろうか。現実には、その都度限られた選択肢の中でよりましな選択をしていくほかないのが通常であろう。」 P 1 5 5

「計画的なモデルとは別に、ノンエリートや地域で生きていく人々の人生モデルが構築される必要がある。ウォルマンは、一般に過度の不便さや貧困によって定義される地域に住む家庭は、経済的な資源だけではなく、時間、情報、アイデンティティといった資源を編成して、『自分たちの流儀で十分うまくこなして暮らしている』ことを示している。筆者は、フィールドワークに基づいて、『地元つながり文化』を共有する若者が、フリーターを選択しながら、互いの資源を共有し何とか生きていく姿を描いた。それらをふまえて、ここでは『ただらと計画性がなくても、その都度よりましな選択をできる生き方』というものを、計画的な人生モデルと並行して提起したい。」 P 1 5 5

「過度の不便さや貧困」とまでいえないまでも、日本のなかで地域全体としてもっともそれに近いところとして、沖縄がある。その意味で、これらの指摘に注目したい。『自分たちの流儀で十分うまくこなして暮らしている』という指摘は、私の体験としてもすごく理解できる。ここでいう『計画的な人生モデル』は、私の知っている「ストレター秩序」と類似のものであるが、沖縄の18-20歳ぐらいの若者をみると、その道を歩んでいるのは、数%以下である。そうしたことを「標準的な道からはずれている」ととらえるよりは、別の生き方を創造しているといいたい。そして、本論文もそうした趣旨に近いようである。

そして中西新太郎らの「第二標準化」について、「若年層における就業意識や就業行動の変化を、たんに第二標準への『転落』に抗う個人的離脱の試みととらえるのではなく、むしろ、第二標準を安定的で魅力的な形態へと転換させる可能性につながる」と引用しつつ、「実存・文化レベルで計画的ではない生き方を肯定し、それを経済的に『よりましな』ものへと変換していく力を身につけていく必要がある」 P 1 5 5 と述べる。

趣旨はわかるが、私はこれまで繰り返して述べてきたように、「標準」という表現はとらない。

そして「これまでの社会で、どれほどの人々が、自己の適性から職業を選び、その職業の種類によって働くことの充実を得てきたのであろうか。適性よりも、むしろその都度の必要と就労可能性から選ばれた職業で働いてきたし、それによってある種の充実を得てきたのではないか。つまり、職業の種類よりも、働くことそのものによる充実というものがあつたのではないのだろうか。」 P 1 5 5 ~ 6

注目したい指摘である。

5) そして、アーレントの労働と仕事についての論に示唆をえつつ、「教育現場では、この労働の積極面がほとんど伝えられずに、仕事の側面のみが過大に語られる。それゆえ、多くの若者にとって、就職は夢の追求とその妥協になってしまうのだ。キャリア教育が伝えるべきは、心地よいウソではなく、現実の世界の困難と充実ではないだろうか。」 P 1 5 6

6) 以上の論をふまえて、中学校に即して「実践のイメージ」として、二つのことを述べる。一つは、上級学年の卒業生を講師として招くことだが、その際に「成功事例」というよりも、「壁に立ち向かっている若者」を呼ぶ事例を紹介している。

「ふたつめには、職場体験よりも、職業調査を行うべきであると考え。『やりたい職業』ではなく『現実にある職業』が調査対象であることを十分に伝え、教師が知っている事実を提供するのではなく、また、ある職業の大人が教えるのでもなく、必ずしも十分知られていない、教師も十分知らない職業の実態を生徒自身が調査するのである。賃金体系や社会保険、労働組合なども調査対象にすえる。体験を中心とすることによって、一時の高揚感を味わったり、特定の職業のイメージをつかむのではなく、様々な職業に共通する性質、すなわち『労働』の側面やそれを取り巻く環境を捉えることができる。」

とはいっても、体験そのものも重要である。いかなる体験をもたせるかを工夫していく必要がある。また、体験も調査も必要であり、体験を通して、いかなる発見をさせていくのか、体験と調査をいかに結びつけていくかという視点からアプローチしてはどうだろうか。

そして最後に「生きるモデルは、時代と社会的位置によってまったく異なっている。これからの時代を生きていく若者の人生モデルは、かつての教員やサラリーマンの経験から導き出せるものではない。望むと望まざるとにかかわらず、より多様で個人化し流動化していくのである。それをすでにわかっているものとして伝えようとする進路指導は必ず多くのウソを含むものにならざるをえないであろう。」 P 157

こうしたことも「モデル」というかどうかの問題があり、私は「モデル」とは述べてこなかったが。そして、ここでの「人生モデル」の用語は、「ライフスタイル」といったほうが適切なのではないか。

私のこの問題にかかわる論も、この論文で述べられていることも視野に入れていくことで、さらに豊かになろう。そういう気持ちにさせてくれた論文である。

2009年11月19日

## 『若者と貧困』本1 リアルな現実提示と鋭い問題提起

明石書店 2009年発行で、編著者は、湯浅誠・富樫匡孝・上間陽子・仁平典宏。

序章で、「雑多の本である。よくいえば「若者と貧困」というテーマで出しうるものを幅広く集め……」と書かれているが、まさしくそういう本だ。ルポルタージュ風のもの、このテーマが照らし出す現実を、鮮明かつ深く映し出す。論文風のもの、対照的に、かなり難解な表現と内容をもちつつ、いくつかの新たな視角を含んで問題提起する。

話題のテーマを、まさに話題性あふれる形で提示している本だともいえよう。

その一端を紹介しよう。

「20年後には、私も含めて、フリーター第一世代は60代に突入していく。家族を形成できず、自分自身の子によっては支えられない大量の貧困高齢者の生活は、社会的に支えられるほかない。」(湯浅誠) P10

「『若者と貧困』を語ることは、若者の貧困を語ることではない。それは、人生前半と後半をつなぐ重要な結節点における脱臼を語ることであり、社会が「社会的」であることに失敗するそのポイントを考えることであり、ちょっと前の子ども(幼少期)の貧困、ちょっと後のおとな(壮年期)の貧困を語ることである。」(湯浅誠) P12

このように、社会のありよう、展望を大きく新鮮な視野でとらえながら、「若者と貧困」が発する問題を鋭く提出する興味深い本だ。連載して考えていきたい。

2009年11月20日

『若者と貧困』（明石書店 2009年）2 国家と社会

「若者と貧困」は、個々の若者にあらわれることだが、それはたんに個人の問題というわけではない。国家、そして社会のありようにかかわる問題だ。

国家について言うと、本書でもでてくるが、国家の福祉・社会保障施策の問題として追求する必要がある。しかし、「社会問題」の処理として、この問題を扱われることが多い。それに対して、当事者を含めて、人々の社会的動きとして、福祉・社会保障施策を要求実現させていく運動を築きあげていく必要がある。と同時に、そういう社会を構成する組織自身が、人々の共同を作り上げ、貧困克服の重要な営みをする人が多い。その実例として、組織自身と組織にかかわる個人のリアルなストーリーをえがいているのも、本書の特徴の一つだろう。

NPO法人自立生活サポートセンターもやい、首都圏青年ユニオンがそうである。そこでのつながりが、貧困のなかで行き場を失いそうになった若者に居場所を提供し、若者相互のつながりを生み出し、次への踏み出しになっていく物語は、とても印象的である。

この問題は、私がここ20年余り主張してきた「結社」「結社の教育」と深くかかわる。「伝統的共同体」が極度に崩壊している大都市の今日の状況下でこの問題は大変重要である。と同時に、「伝統的共同体」がかろうじて残っているところでは、こうした結社づくりを視野に入れた、共同体＝コミュニティの再創造に挑んでいかななくてはならない。大都市にあっても、結社だけでなく、結社を軸にしつつも、コミュニティの再創造の課題を視野に入れたい。そうした流れと結びあって、自治体・国の社会保障・福祉施策の転換を求めていきたい。

なんだか一般的な話になってしまった。すみません。



2009年11月21日

## 『若者と貧困』本3 「非標準的な生き方」への団塊世代の憧れ

対象となる若者は一部を除けば、東京に代表される大都市の若者たちである。執筆者も若者と自己規定する人たちだ。それに対して、私は、沖縄の田舎に居住し、そこに住む若者たちと出会う。そして、「団塊世代」の直前というか、団塊先駆け世代というか、その私とは、かなり異なる世界である。それだけに新鮮に感じ、教えられる点が多い。と同時に、私と出会う若者、そして私自身との違いを意識させられる。

そのあたりをめぐって、書いていこう。

まず本書のなかで書かれている「団塊の世代のメンタリティ」について、興味ある指摘を、難しい文だが、そのまま紹介しよう。

「強度の集団主義をとまなうこれこそ懐疑・否定の対象のはずだが、その盤石な社会保障代替機能を捨ててまで、日本型経営を否定しようとするトレンドは生じなかった。(中略) 物質的な利得をとまなうがゆえに、信じてなくても従わざるをえない「標準」的なライフコース。これは一方で、「非標準」的な流動性に対する憧憬を生む。1980年代後半に初めて「フリーター」と名づけられた人々には、その屈折を投射するかのようによくの称賛も向けられた。「客観的」には「標準」というライフコースが定められていて、にもかかわらず、意識面における個人化が進む。この乖離は、例の「構造に埋め込まれているけど、その構造を信じちゃいない」という世界への接触技術と親和的である。」(仁平典宏) P 2 2 2

## ※ 憧憬＝憧れ

「非標準」的な流動性に対する憧憬にとどまらず、それを実践する人たちもいた。たとえば、社会運動組織にかかわったり、また農業にいそしみつつ、環境問題などに取り組んだりする人たち。ある意味で、オルタナティブの生き方である。それらに専門的にかかわる人は少ないとしても、結構な数であったはずだ。しかし、その多くは「流動性」というよりも、「ライフコース」のなかの「革新」的な道を歩むという感覚であったかもしれない。その意味では、「標準」の枠内であったといえるかもしれない。

そういう私も遅まきながら、そういう生き方を2000年代になって始めた。そして、私のような早期退職ではないにしても、「定年後」に、オルタナティブの生き方を始める人は結構多い。この世代における「田舎暮らし」は典型である。だが、それまでの「標準」の生き方と個人化との乖離が、実際生活との間での矛盾となることも多い。例えば、都市型生活が体質化しており、それを田舎でもしてしまう、ということに基づく問題は日常的に発生している。だが、その問題は、この世代に限らず、若者の田舎移住者にも共通しやすい。

少し話を戻って、「非標準」的な流動性に対する憧憬」というのは、私の近年のありようへのまなざしにも強く感じたことであった。たとえば、6年以上前の退職前後のころ、今のような生活をするを公表していたが、信じてもらえなかった。それは「口実」であって、他の大学へ移るためだろうというのが、おおかたの反応だった。実際に私が沖縄田舎暮らしを始めると、「私もやりたいが」というが、「やってみれば」というと、

「いや、私にはできない。住宅借金があり、子どももまだ・・・」などと、いろいろな言い訳を聞いた。実際のところ、財政的には、私よりはるかに余裕があるかたちだ。

また、生活指導学会で、わたしの生き方を題材に人生後半期の生き方について問題提起したが、私とほぼ同世代の方からは「かっこよすぎる」「道楽だ」との不思議な反応をいただいた。でも、本書の「憧憬」という表現に出会って、「そういうことか」とガテンがいった。

2009年11月22日

## 『若者と貧困』4 これまでの「標準コース」の問題性

前回に続く話だ。

もう一つ、ここに大きな論点がある。「標準」的な生き方の中で、比較的高い収入を得られる人たちは、日本における「富裕層」の一角を担っているという事実をどう見るかということである。彼らは、被雇用者であるという点では「労働者」であり、不当な収入を得ているわけではないと思われるだろう。だが、年収1500万円以上の人々も「富裕層」でないと言えるのだろうか。見方によると、1200万とか、1000万とかの人々もどうなのか、と考えた方がいいといえるかもしれない。

その人たちを「標準」と言いきっていいのだろうか。私個人についていうと、10～20年前、そういう時代があった。その時、組合でベースアップを要求することにひどく違和感を覚えた。非常勤講師の方々には、時給換算すると1/10近くしか払われていない。だから、場合によっては専任の給与をさげてでも、その分非常勤給与の大幅アップをはかるよう主張した。かなり前で、正規/非正規労働の問題が今日のような形では話題にならなかったころだ。

こうした「富裕層」的な視野で考えることには、正規/非正規労働の問題のことに加えてもう一つの視野が必要だ。1990年ころ、庄司興吉さんの書籍のなかで、当時の日本の「標準的」な年収層のかなりの部分が世界的にみれば、今でいう「富裕層」の該当する、という視点から問題を考える必要があるという指摘が、私に強いインパクトを与えた。これは、私が早期退職した一つの理由でもあった。「不当に」高い給与を得ているという感じから逃れたかったのだ。

こうした国際レベルでの視野の問題は、本書記事の1で紹介した、湯浅さんの問題提起と重ねて考える必要があろう。再度引用しよう。「20年後には、私も含めて、フリーター第一世代は60代に突入していく。家族を形成できず、自分自身の子によっては支えられない大量の貧困高齢者の生活は、社会的に支えられるほかない。」(湯浅誠) P10

すでに、その兆候は表れている。日本は、収入と生活で、「富裕層」と、そうでない層（「貧困層」をふくめて）とに大きく二分されていくだろう。それはアメリカ社会ですでに表れている。また、地域的な差ですであらわれている。沖縄は収入額面的に言うと、おおよそにおいて、非「富裕層」のなかにくくられている。

紹介を続けよう。

「日本型生活保障システムを自明視してきた世代の多くは、〈高学歴取得—正社員への就職〉以外のビジョンを子どもに提示することができない。かつての前提が崩れている中で正社員にこだわるという身ぶりは、子どもを追いつめることになるというのに。

人間関係についても、(中略) 団塊世代は社会関係の解放化・偶有化を大きく進めた世代であった。しかしそれは逆にいえば、そこから解放されるべき対象(仮想敵)を設定しえたということでもある。それは、1970年代までは「イエ制度」や農村の伝統に根ざした社会関係であったし、それ以降は、「近代家族」的秩序だったり、「日本的経営」を基盤とする会社の濃密な人間関係だったりした。それらが強固だった分、そこからの解

放は正当性をもってとらえられた。しかし、関係性の偶有化の亢進が、仮想敵たる「既存の秩序」を消尽し尽くすと、関係の偶有性は外部をもたなくなる。既存の秩序からの自由が、そのまま解放感や承認につながるという「団塊」的しあわせは成立しない。(中略)

日本の生活保障システムが前提とした「標準」的ライフコースは、年齢層を下るにしたがい、ますます「標準」ではなくなっていく。その弊害が表れるのは社会保障の領域だけではない。住宅取得についても同様である。」(仁平典宏) P 226~7

この引用の最後にかかわっていうと、住宅取得とならんで大学進学についても同様のことがいえよう。沖縄の大学進学率が30%で、全国平均50%を大きく下回っているのは、それを示しているだろう。10年以上前に、大学進学させている家族の年間所得は、一人の大学生であれば600万、2人以上であれば1000万というデータに出会ったことがある。こういうデータで見ると、沖縄では子どもを大学進学させられる所得がある家族は大変限定される。

また、私は、10年ほど前に、18歳人口と大学総定員とのかかわりで「大学サバイバル時代」が論議された時、当時の30代の所得の低下状況は、10年後の大学進学者数を大きく減少させるだろうことも視野にいれる必要を問うたが、当時は相手にされなかった。しかしいまや現実問題にされつつある。

もう一つ重要なことは、今紹介した文の前半、つまり「日本型生活保障システムを自明視してきた世代の多くは、〈高学歴取得—正社員への就職〉以外のビジョンを子どもに提示することができない。」にかかわることだ。しかし、現実には、この指摘の通りだ。そして学校教育の大勢が、この枠で動いている。それ以外を歩むものに対しても、この枠で歩むことを求め、はずれることを否定的にしか見ない。この問題は、すでに多くの生徒がこの枠では歩めないことがはっきりしている沖縄にあってもそうだ。私がいま、沖縄タイムス教育欄で連載していることも、このことに深くかかわっている。

そして、以上の指摘は、団塊世代だけでなく、現在の40代で「標準」コースを歩んでいる人にも言うることだ。さらに、30代でも「標準」のなかでより安定的な地位をえている人たちにも当てはまろう。

2009年11月23日

## 『若者と貧困』5 「標準でない」生き方の創造へ

前回の話の補足だ。

「標準の生き方」を歩む「団塊世代」、あるいは現在30代以上で、ある程度安定的な生活が確保できている人々が、「標準でない」生き方を始める時、多少のリスクはあるとしても、生活上の安定が確保できるという見通しをある程度もちながら着手する。

80年代の「フリーター」とよばれる人たちも、そうであろう。私もそうであった。また、私の近辺にいる若者にしても、すでに、「標準」に近い仕事に数年ついていて、そこをやめて、100万円ぐらいの貯金をもち、ある程度の資格・技術めいたものをもっておられるかたがおられる。コンピュータ関係の職についていた人のケースはその例だ。むろん、そうしたものもなしに、人間関係だけを頼りにこられる方もいるが。また、ある種の「自信」をもって、来られる方もいる。わたしには、「よくやるな。若いエネルギーというのは財産だな」とつい思ってしまう。

だが、今日の「標準でない」生き方をしている方々の多くはそうではない。ある種の「やむをえぬ事態」、場合によっては破局的事態になかで、そこに追いやられたというべきであろう。それに対して、かれらを批判的まなざしでもって見る人々は、結局は「標準の生き方」を求める角度から、あるいは「自己責任論」から、問題を論じやすい。

今日の教育にしても、「標準の生き方」しか用意できていない。そして、「標準でない」生き方になった人を、批判的まなざしでしか見ない雰囲気を作り出してきた。

そうした「標準」というものを定める発想をきりかえ、多様な生き方を保障し、それぞれが「生活」できるようにしていく展望をあたえ、教育としてそれらの力量を育成していく道筋を創造していく必要がある、というのがわたしの主張だ。私流にいうと、「地球おこし・地域おこし・人生おこし」の教育を追求することだ。このオールタナティブな教育については、蓄積はほとんどないだけに、イメージすることすら困難かもしれない。だが、そこに踏み出すしかない。

2009年11月24日

## 『若者と貧困』本6 人間関係上の貧困と経済上の貧困

経済上の貧困と人間関係上の貧困をセットにしてとらえる見方が、ルポルタージュなど所々で登場してくる点に、私は強い関心を持つ。

ルポルタージュなどでは、「貧困」状態に置かれた若者の場合、経済上の貧困と人間関係上の貧困が併存していることが示される。また、そこから抜け出すこともまた、両者が並行していることが示される。

若者が孤立するとき、日常生活が、孤立的職場と孤立的宿所との往復、それに付け加えるとすれば、コンビニでの食品購入など、金銭に依存した生活維持となりやすい。彼らの私的空間は、狭い宿所と商品提供店に限定されてくる。そこに人間関係的なものが入り込む余地がどんどん縮小されていく。

食事飲酒という、身近な例で考えてみよう。こんな例はさびしい。一人で、居所で食べ飲む。食堂酒販売店で、一人食べ飲む。

食堂居酒屋で、数人で食べ飲むのは、いいと思うが、経済的貧困の場合はなかなかできない。とすれば、共同の場所で、何人かで食べ飲むとか、開放的な個人宅で、何人かで食べ飲むというのがあってよいのではないか。本の中には、ユニオンで皆一緒に食べる例がでてくる。誰かが作るのだが、さらに、食材を共同で手に入れ、作るということになれば、なおいい。

何人か以上で、共同で作って食べ飲むということが、人間関係の豊かさを生むし、参加者個人の豊かさを生み出すのだ。

こうした人間関係の豊かさは、経済的貧困を補うだけでなく、経済的豊かさを築くきっかけさえ作り出していく。

経済が数値化しやすいのに対して、人間関係は数値化しにくい。それだけに、貧困問題の対策を考える際、あるいは研究の際にも扱いにくいだろう。しかし、この両者をからめて検討することは不可欠だ。

私自身を含めて私が住んでいる周辺は、金銭額だけで言うと、東京の「貧困」ライン以下であるかもしれない。しかし、人間関係の豊かさがあるためか、「貧困」の雰囲気は希薄だ。公民館やどなたかの家でみんなで飲食することはよくある。

例外はある。住宅建築と子どもの教育費だけは、経済上の貧困ではどうしようもない。また、医療費なども、そうなりそうな気配だ。

2009年12月14日

「迫られる自立像の転換」中西の指摘 『子どもの貧困白書』8

※ 子どもの貧困白書編集委員会編「子どもの貧困白書」（明石書店 2009年）についての連載記事の最後に書いた記事である。

中西新太郎は「迫られる自立像の転換」を、以下のように提起する。

・「若者イコール「社会的自立を遂げた存在」という前提が今日の日本社会では通用しないこと、経済的自立も生活上の自立も現代社会の青年層にとってはきわめて困難な課題となっており、自立の像と基準とを組み替えないかぎり、若者はいつまでも社会人としては扱われず、「子ども」に閉じ込められることになる。」 P 257

・「ワーキングプア水準におかれた青年労働者の増大は、必然的に離家を遅らせ、未婚率を押し上げることになる。30代前半男性の半数が未婚にとどまる事態は、生活上の自立が従来のかたではとらえられないこと、またそうすべきではないことを示している。」 P 258

・「「働き方の貧困」は自立を阻害する（働き方の貧困には低処遇のみならず、社会的孤立・精神的困難といった要素も含めて考えるべきである。貧困現象は複合的な形で現れ、若年層ではとりわけ孤立やうつ状態等の精神的困難が鋭く出現している）。

これは、勤勉でないこと努力しないことが貧困をもたらすという偏見に満ちた通念とは逆の事態である。働いても働いても、ますます自立から遠ざかってしまうのである。」 P 258

・「アルバイトの延長線上で高卒後の仕事を決めるような「キャリア形成」は、進路指導が想定する職業的自立からかけ離れているが、そうした「選択」は貧困の中で何とかやってゆかねばならない子どもたちにとっては自然の成り行きである。」 P 258

・「学校から社会への移行過程に貧困問題がくい込んで移行の困難が広がるとともに、職業的社会的正統と見なされる経路とは異なる、もう一つの経路が出現しているといえよう。」 P 259

鋭い指摘の連続である。

こうした議論に、小さい形ではあるが、これまで私なりに参加してきた。「ルール型」「ストレーター型」「トコロテン型」などといろいろな表現を使用してきたが、1960年代に形成され、1970～80年代にすべての子どもたちを覆ったかのようにみられる秩序の部分的限定、ないしは崩壊が1990年代にはいつて表面化してくる。

この秩序がなかなか一般化しなかった沖縄でも、1980年代後半から、教育界・親を圧倒していく。しか

し、そうでない生き方が事実として広く存在してきた。

こうしたなかで、従来の「標準型」とは異なるものを、どのように把握・提起していくのか、それが課題となっている。そのことについては、また改めて書くことにしよう。



2009年12月26日

## 「ノンエリート青年の社会空間」を読む1 本の概要

本のフルネームは、中西新太郎・高山智樹編著「ノンエリート青年の社会空間——働くこと、生きること、「大人になる」ということ」（2009年大月書店）である。

共著者のお一人から贈呈された本だ。私の関心事であるだけでなく、私がこの7～8年にわたって追求してきたテーマの一つ「〈生き方〉を創る教育」にかかわる問題を、異なるアプローチから追求している本だ。

特に多様な「ノンエリート青年」についてルポルタージュ風というか、中には自らの体験を通して描き、一定の考察を加えている点で興味津々だ。東京の非正規雇用の現場で働く若者たちを描いているので、沖縄の田舎に暮らす私には、とても新鮮な情報であるとともに、私の周りの若者たちとの共通性と異質性を考えさせる点がとても多かった。

この本の特徴であり、興味深さを作り出している最大のもは、なんといってもノンエリートの労働—生活を描き出している、全体の8割以上を占める章だろう。それらの章のタイトルを紹介しよう。

第一章 専門学校生の進学・学び・卒後

第二章 自転車メッセンジャーの労働と文化

第三章 若者が埋め込まれる労働のかたち (引っ越し業の世界を描く)

第四章 請負労働の実態と請負労働者像

第五章 大都市の周縁で生きていく——高卒若年女性たちの五年間

序章で、中西新太郎が、この本の「趣旨」のようなものを書いているので、その中で印象的なものを紹介しつつ、私なりのアプローチと交差させてコメントしていきたい。

2009年12月27日

## ノンエリート青年本2 「所与性のドグマ」と「レール型生き方」

この連載のこれからは、中西新太郎執筆の「序章 漂流者から航海者へ——ノンエリート青年の〈労働—生活〉経験を読み直す」を紹介しつつ、私なりのアプローチでコメントしていこう。

まず、キーワードとして使われている「所与性のドグマ」について紹介しよう。

「既存のアプローチが内包している青年層理解を「所与性のドグマ」と名づけよう。「所与性のドグマ」とは、職業的社会化の過程と様式、〈社会的排除—包摂〉モデル、正規化戦略モデルなどに含まれている、既存の（バブル期に至る開発主義体制下の企業主義秩序を事実上の参照基準とした）解釈枠組みを指す。ドグマのドグマたるゆえんは、構造改革時代の現実にそぐわない解釈枠組みをあてはめ、その結果、現にある問題の所在が取り逃がされ、ずらされてしまうところにある。」P5

これは、私が、教育論的アプローチから、「1960年代型生き方」「トコロテンコース」「レール型生き方」などと、いくつかの表現を使って書いてきたことと重なっている。

双方のいずれの表現を使うにしても、これらは1990年代初めまで、日本の大半の人々をおおう「ドグマ」として機能してきた。だから、次のような指摘が成立する。

「一九七〇年代の経済大国化（消費社会化）以降、バブル期に至る青年問題は、もっぱら消費主体としての若者（それはまた、文化次元に局限された若者論ないし若者文化論でもある）に焦点をあててきた。消費主体だけに焦点があてられた背景には、〈労働—生活〉主体としての若年層がおおむね安定的に企業社会秩序内に編入される、という暗黙の了解が存在していた。標準的で固定的な（動かしようがなく「運命的」な）ライフコースが一方では標準として想定され、他方では、文化的にのみ若者像、表象が作られ論じられたのである。」P5

学校教育の世界では、子どもたちが、この「ドグマ」「生き方」から「外れる」「落ちこぼれる」ことを避けることに、力を注いできた。このコース以外に生きる道は、例外中の例外であって、学校教育の対象外になるとさえ言いうる状況だった。「落ちこぼれ対策」「不登校」「中退」なども、こうした角度からとりくまれることが圧倒的であった。

だが、この「ドグマ」に囚われないオールタナティブな生き方、生き方追求が存在したことを確認しておく必要がある。その点は、後で再論することにしよう。

新自由主義的政策、構造改革時代に入る1990年代半ば以降、事態が激変する。企業の「生き残り戦略」として、非正規雇用者を激増させる戦略がとられ、「所与性のドグマ」が提示する道を大きく制限する。

その中で、次の事態が登場する。

「所与性のドグマ」は、このように、青年層の現実を構造改革時代に固有の文脈にそくしてとらえる方途を

もたない。青年層のライフコース全般に対する均質の解釈枠組みに立っているために、社会標準として現実に機能している行動規範や生活戦術をそれとしてとらえることができず、標準から外れた現象として解釈してしまうのである。」 P 7

構造改革を推進した側は、「所与性のドグマ」に代わるものを提出しなかった。青年層が、「所与性のドグマ」に沿って生きる道を大きく制限しただけだった。にもかかわらず、「所与性のドグマ」にもとづく生き方を、青年層を含む人々全体に、求め続けてきた。その結果、青年層の多くは、「期せずして」、「所与性のドグマ」以外の道を歩むしかなかった。

こうして、

「開発主義体制のもとでの青年期・青年問題から新自由主義型社会のもとでの青年期・青年問題への移行が進んでおり、この移行に焦点をあてたアプローチが不可欠と言えよう。」 P 9

という事態にいたって、すでに10年以上が経過した。青年達本人が施行錯誤的探索をくりかえしただけでなく、この問題に関わるものも試行錯誤的状況にある。

無論、福祉国家的施策の要求、対抗運動側による共同の取り組みなど、多種多様な模索が存在する。そのなかで、当事者のノンエリート青年たちが、どのような模索を展開しているのか、そこを浮かび上がらせるのが、本書のテーマでもある。

2009年12月28日

### 「ノンエリート青年」本3 第二標準

「所与のドグマ」が指示するものとは異なる「働き方・生き方」をする青年達のなかに、「第二標準」が出現していると、次のようにいう。

「中位層の移行、就業、逸脱、生活意識には還元できないもう一つの標準、ノンエリート青年としてさしあたり概括できる層がたどる第二標準が出現しており、これを標準としてとらえるアプローチが必要なのである。」

P 7

「外れた現象」ではなく、別の社会標準によって規律された現象としてとらえよう、ということである。」

P 7

「キャリア」や「熟練」や「生活経験」といった、社会人たる資格を表象する際に用いられる観念からほど遠い生き方が「普通」になっている、ということだ。」 P 10

興味深い視点である。ただ、私には、「標準」「第二標準」という表現が適切かどうか、は気になる。「所与のドグマ」が指示するものとは異なる「働き方・生き方」をする人たち」という表現でいいのではないか。指示するものとは異なる、という意味では、「オールタナティブ（複数）」な生き方とっていいかもしれない。

「標準」という用語を使用すると、「モデル」という意味合いが付きまとい、そこへと向かう動きを誘い、それ以外のものを「標準ではない」と見なすかもしれない。また、「第二」という表現には、想定される「第一」への対抗のニュアンスが生まれ、二つの標準とのせめぎ合いという構図を描く人が出やすい。しかし、ここでの「第二標準」は、実際の姿の帰納として、使用されている。別の言い方をすると、「平均像」に近いニュアンスを持っている。

イギリスのミドルクラスに対する労働者には「標準」が存在し、「標準」と「第二標準」とのせめぎ合いという視角からの検討をひきだしやすいが、今日の日本の状況を、それらと重ね合わせることは無理があるような感じもする。

もう一つ、「ノンエリート」という表現は、私には落ち着きにくい。本全体では、「エリート」か「ノンエリート」かで、論が進んでいるわけではない。「所与のドグマ」が指示するものに沿って働き生きる人とは異なる「働き方・生き方」をする人たちが検討対象だからである。「エリート」か「ノンエリート」かでは、別の論の展開が求められてしまう。

日本では、「所与のドグマ」の中に、まさに「標準」として、大半の人々、青年が組み込まれていったのは1970年代のことだったが、「一億総中流」幻想がそれを強力に補強した。

それ以外にあるとすれば、1950年代まで人口的には多数を占めた農家や職人の世界だ。家業継承という形である。それらは「所与のドグマ」が成立・確立する1960、1970年代前半にあっても、なお存在していた。それ以降は「地下に潜った」ごときである。例外は、沖縄などにある。

沖縄では、「所与のドグマ」が成立・確立するのは、1970年代から1980年代にかけてである。とはいえ、それ以降も、「所与のドグマ」に沿った働き方・生き方をするものは、実際には多数派にはなかなかならなかった。それだけに、学力問題に象徴的に表れるが、「所与のドグマ」参入への圧力は強力であった。そしてまた、その裏返しでもあるが、「所与のドグマ」に距離を置く姿勢も広く残っていた。

そしてまた、1980年代には文化の次元での「対抗文化」追求だけでなく、働き方・生き方としても、オルタナティブな生き方の追求があったことは見落としてはならないだろう。環境問題平和問題などの追求を、生き方としても追求する多様なありようが存在していた。そんななかで生まれた言葉が「フリーター」だったので。

そうした流れと、本書が扱うノンエリート青年の働き方・生き方模索がどうかかわるのか、それも興味深い論点になっていくだろう。

2009年12月29日

## 「ノンエリート青年」本4 「なんとかやってゆける」仕方

「第二標準」で働き生きる青年たちに象徴的なこととして、「なんとかやってゆける」仕方があるとして、次のように述べる。

「開発主義体制下における社会標準と違い、職の見通しも生活の見通しも立てにくい状況に置かれながら、「なんとかやってゆける」仕方を案出し実行すること——それが、ノンエリート青年層の「漂流」のなかに存在する「戦術」であり、〈社会〉人たることのリアリティなのである。」 P 1 1

「流されているとしか映らない〈労働—生活〉世界の現実にも、なんとかやってゆこうとする志向と動線、「努力」とその帰結等々を析出することが可能のはずである。」 P 1 2

「「なんとかやってゆく」世界へのアプローチは、したがって、試行錯誤の労働と生活を、その場その場を生きる以外にないノンエリート青年の生の軌跡を、十全に聞き取ることから始まるだろう。」 P 1 1

これが本書の各章がやっている作業だ。

「なんとかやってゆける」仕方のなかに見出すこと、見出すべきことについて、次のように述べていく。

「なんとかやってゆく様式にはまるで自律性が欠けていると見えるかもしれない。がしかし、安定した人生展望をもっているかのように見なされる正規労働者にしても、資本の支配力から独立の自律性を確保しているわけではない。」 P 1 2

「「仕事を転々とする」と括らない仕方で、遍歴の意味を読み取ることが必要となる。「転々」とせざるをえない条件・環境があり、そうであるからこそ、彼らの遍歴に組み込まれているノンエリート青年労働者の「戦術」を汲みとることが重要なのだ。ここでいう戦術は、その時点時点でよりよい条件を求める探求であっても、正規雇用の確保へと向かう一元的なステップとは限らない。より安定した、やりやすい（雰囲気の良い、人間関係の良い）職場への移動は、正規職への到達とぴったり重ね合わさっているのではない。」 P 1 4

「ノンエリート青年の職業遍歴を評価する際に必要な視点は、したがって、「所与性のドグマ」によって見失われてきた試行錯誤の安定化戦術と、これを可能にする関与的關係の布置・剥奪構造を見てゆくことである。」 P 1 4

「遍歴経験を通じた「働きやすさ」認知の習熟が、より安全な移動方向と働く場所とを感知する羅針盤になる。そしてそのことは、日々の生活を少しでも多く安定させる、微細だが無視できない「資源」の蓄積を意味する。」 P 1 4

ここで紹介してきたことと、「社会」とのかかわりについて、以下のように述べる。

「低層の社会化過程とライフコースとを歩むノンエリート青年の所困難を〈社会〉問題のアリーナへと政治化させないところに、ことがらの本質があるといつてよい。」 P 8

「「なんとかやってゆく世界」が出現する背景には、社会問題を私的に処理する強力なメカニズムがはたらいているのである。」 P 30

「他人のせいにしては思わない」という受忍のあり方を、単に自己責任イデオロギーへの囚われとだけ見てはならない点に注意したい。すなわち、ぎりぎりまで「自分でなんとかしようとする」心性には、自己の人間的尊厳を守ろうとする意思が、たとえ無自覚ではあれ、潜んでいるということだ。」 P 30

これらの指摘は、新鮮な問題提起を多分に含んでいる。とはいえ、「対抗運動」側も、どう対応したらいいか、それについては試行錯誤的というか、模索的であるし、それ以前に、課題としての自覚が希薄だとさえいえるかもしれない。

「ノンエリート青年が「なんとかやってゆく世界」は、したがって、公的支援のみならず、運動圏に支えられた社会的支援の得られにくい状況の中で、それ以外のやりようがなく形成された現実ということになる。」 P 30

対抗運動側も、「所与のドグマ」に取り込まれているといえなくもない。福祉国家的施策要求には、無意識にそれが見られることがある。また、学校教育にかかわっては、「所与のドグマ」からの「落ちこぼれ」をおさえこむための「援助」にエネルギーを注ぐ対抗運動は強力だ。しかし、「所与のドグマ」ではない働き方生き方を支援する動きは、か細い。

2009年12月30日

## 「ノンエリート青年」本5 人間関係

本書のいう構造改革時代の労働現場は、多様な人間関係によって構成されているにもかかわらず、人間关系的要素を最小限化して、あたかも「物」の関係かのごとくに扱う特質をもっているようだ。

人間関係を抑圧し破壊するのだ。それは、労働現場だけでなく、生活現場でさえも、金銭・商品購入の「物的関係にとりかえようとする。

そうした環境に置かれ続けると、人間関係を構築する力量・意欲が成長しないだけでなく、それを煩わしいものとして避ける姿勢、あるいは、物关系的につきあう作法さえ成長してくる。そうした姿の進行状況には、地域差が大きい。金銭・商品購入依存が極度に高い大都市、本書の対象としている東京などは典型事例だろう。

私が暮らす地域は、以前とは大きく異なっているとはいえ、対照的でさえある。だから、本書にでてくるケースを出会うたびに、そんな事例まであるのか、とってしまう。

それでも、私近辺に、東京などの大都会から移住してきた若者たちは、この地域の人間関係の豊かさに感激しつつも、大都市の感覚で、人間関係を取捨選択し、好む部分とだけ付き合う人が結構いる。そして、コンビニがないことを愚痴る人さえいる。多分、この地域の人間関係資源が過剰だと感じるのだろう。

脱線したが、本書に出てくる青年たちは、「物」化した人間関係だけには耐えられず、何らかの人間関係を構築する営みを、無意識に近い形で始める。それを読み取ることに、各章の執筆者はかなりのエネルギーを注ぎ、興味ある記述を提供している。

それらを踏まえながら、序章で中西は次のように書く。

「仕事に就くことも離れることも、個々人の決断によってだけでなく、同じように低層の遍歴コースをめぐる労働者相互の関係、かかわり方によっても深く規定されている。」 P 15～6

「移動のリスクを軽減するさまざまな資源は、若年層ではとくに貧困であり、公的保障（失業保険、職業訓練）を受ける機会、条件にも恵まれていない。家族を除いてわずかに頼れるのは、彼らが持ち合わせているインフォーマルな友人関係であろう。」 P 16

そして、そうした人間関係を「共同」の方向で追求することに注目する。

「リスクを個人的に引き受けるのではなく共有できることが、よりましな働き方に向かうリアルな土台となっている点を見逃すべきではない。所与性のドグマに囚われることなくノンエリート青年層の「キャリア」をつかみ評価するためには、不安定・不熟練職種をめぐる浮遊としか見えない行動に、ある種共同的な過程という性格が潜んでいることを考慮しなければならない。「親密な他者」という関係資源が、移動の重要な動力となっているのである。」 P 16

「労働—生活世界における「親密な他者」が象徴するのは、個人単位で不利な目に遭わされ続けるノンエリート青年が、状況を切り抜けやりすごすために仕方なく編み出す「共同の戦術」にほかならない。」 P 31～2



「ノンエリート青年の労働世界に現れる「親密な他者」像は、このように、構造改革時代の労働規律・規律権力に対する潜在的な対抗の次元を含んでいる。」 P 1 8

こうした共同的動きを、さらに自発的な結社づくり（高度な結社というよりは、一時的な出会い関係以上の継続的つながりがある、といった程度でもOK）へとすすめるように発展することを、教育が担うことを願って書いたのが、私の「〈生き方〉を創る教育」（2004年大月書店）だ。

さて、人間関係の解体のみならず、社会解体へと推し進めようとする動向に対して、これらの動きは、人々の労働現場・生活現場を起点にした社会形成・社会再生の営みでもある、という意味付けが与えられる。

「徹底して状況依存的な介入ネットワークの存在が示唆するのは、「たまたまよくしてくれた」と語られ意識される個別的体験の背後に、モラル・エコノミーのエートスに通底する共在感覚、生の解体をとりあえず回避させる一点ではたらく相互扶助の基底層が潜んでいるということである。それはおそらく、新自由主義構造改革によって行き詰った弱者の危機を社会の大規模な暴力的解体へとすぐさま向かわせない一つの根拠であり、労働と生活との解消できない跛行をなんとかやりくりしてゆく創発的「保障」にほかならない。あらかじめ頼りにできないとしても、ノンエリート青年の完全な孤立に抗うインフォーマルな関係資源として、多様なかたちでの「親密な他者」が存在している。」 P 2 2

「新自由主義的社会環境が強いる「漂流」に効果的に抗うための「他者」の探索と発見は、構造改革時代の就業と生活における共同航海の試みとして読みとることができるだろう。」 P 3 2

そして、対抗運動にとって、そうした課題があることを提起する。近年各地につくられてきているユニオンは、その一つだろう。わたしの知人もそうしたユニオンを担っており、私もその出会いに一度参加したが、感動的であった。

「経済的窮迫が孤立をもたらすだけでなく、その窮迫を逃れる努力（広域移動による仕事の確保等々）までもが孤立を促進してしまう現実を踏まえ、運動圏による関与には、経済的困難の解消という課題に加え、関係資源のライフプランを構築する（コーディネートする）という課題が存在するだろう。」 P 3 3

2009年12月31日

## 「ノンエリート青年」本6 家族形成

経済的に貧困である見なされる青年達は、結婚・出産・育児といった家族形成においても、困難だと見なされたりする。

「働いて稼げた範囲で生活するならば結婚等の将来展望を見出すことができず、ライフコースは閉塞させられる。とはいえ、離家や結婚を「強行」すれば労働と生活双方にわたるより大きな困難に直面する。この深いジレンマ」 P 21

にもかかわらず、結婚・出産・育児へとすすむ20歳前後の人たちがいる。「できちゃった婚」とは限らない。

「彼らが早婚に走り、子どもを持つのは、「無謀」「無計画」のゆえでなく、それ以外には結婚や出産の機会をもてない現実のゆえであり、したがって、その現実にくすした標準的な振る舞いと見なせるのである。」 P 8

「所与性のドグマ」は、「生活が成り立つように働く」エコノミーの論理を基準として、そこから外れるコースを、「いい大人になっても落ち着かない」逸脱ととらえるものであった。「社会人」としての経済的自立が、すなわち、「家庭人」としての独立・定着と直結させられていたということである。」 P 19

中西は、かれらの中に新たな模索があると読み、つぎのように書く。

「再生産の困難とは、第一に、結婚・出産の抑止（家族形成の困難）である。近年の格差社会論で下層に陥ると結婚もできない恐怖としてかたられているこの困難には、しかし、家族形成の既成秩序を掘り崩す矛盾が潜んでいよう。」 P 20

実際、私の近辺でも、独身のまま40代を迎える人は多い。経済的に家族形成が困難であるという理由もあるが、「結婚はどうしてもしなければならない」という感覚から自由な人が多くなっているのも確かだ。そのあたりで、60代以上の親との感覚のずれが広がりつつある。

また、夫婦年収1000万円以上にあっても、子どもはせいぜい2人、多くは1人にする、あるいは子どもなしでいく、のいずれかが一般的になりさえしている。そのなかで、子どもの数3~4人が広く見られる私の近辺も含めた沖縄は、大きな違いを見せる。そういう沖縄でも、子どもの数は減り続けている。

こうしたなかで、家族などをめぐる「所与のドグマ」の賞味期限は切れつつある。それにもとづく少子化対策も、実像とのずれを表面化させつつある。

こうして、新たな家族像が、「なんとかやっけてゆける」も含めた、人々の試行錯誤のなかで形成されつつあるとあってよいのかもしれない。

ついでの話。「なんとかやってゆける」は、ウチナーグチでいうナンクルナイサーがぴったりくる。むしろ、その方が「健康さ」さえ感じさせるので、なかなかよい。

もう一つ、ついでの話。子どもを作り育てる家族の教育についてだが、大都市あたりでは、高収入家族は私立中学コース、低収入家族は公立中学という分化が広がっているようだ。また、もはや、高卒ではなく大卒が一般的条件になりつつあるようだ。大学卒はエリートではなく、「普通」に暮らす必要条件というわけだ。だから、子どもを大学に通わせられないのは、経済的に貧困だというイメージに近づきつつある。

その点でも、大学進学率30%の沖縄は事情が大きく異なる。私の近くでは大学進学はマイナーなのだが、大都市から移住してくる若者たちには大学卒が多い。

2010年1月1日

「ノンエリート青年」本7 年収水準 金銭依存 沖縄

「非正規労働者の処遇は単身ではもちろん、夫婦共働きの場合でも子育てに確実に困難を来す水準にとどまる（三〇歳代年収三七四万円、二〇歳代二六五万円という年収水準に対し、子育てが可能な年収水準として五〇〇万円前後が想定されており、そのギャップは大きい。）」P19

この記述は、東京に住む人が読めば、「あたり前」かもしれない。しかし、私の近辺の人が読めば、驚くだろう。

つい先頃の発表によれば、沖縄の一人当たり平均県民所得は、二〇〇万円ちょっとだ。世帯平均に換算すれば、五〇〇万円いくかないか、である。

このブログなどで何度も書いたが、沖縄の「田舎」では、たとえ所得が200～300万円ぐらいでも、きちんとした生活はできる。そういう私たちもそれに近い。問題は、大学や専門学校に通学させることに代表される教育費だ。

問題として浮上するのはまずは教育費問題だが、大都市では、教育費を除いてもなお高額な生活費が必要となる、という問題がある。金銭・商品過剰依存になってしまう構造をどう考えるか、ということだ。

その問題と人間関係形成とをかかわらせて考えようというのが、私の一つの視点だ。例えば、貧困問題を経済と人間関係の双方をからめて考える必要があると思う。

もう一つ、世界的というか、地球的視野で考えたとき、どうなるかということだ。そこには、先進国と途上国との関係、加えて、エコロジー問題からのアプローチがある。それは、人間と自然との関係の問題である。

貧困問題と社会のありようを解くうえで、こうした視点は不可欠だ。その点で、沖縄は興味ある位置にあるのだ。日本の中での、地域の違い以上のヒントが存在しているように思う。

2010年1月2日

## 「ノンエリート青年」本8 いろいろと

「問題はしかし、比類ない規模と深さで青年層を孤立させてきた社会そのものであり、当の社会（構造改革時代を通じて出現した新自由主義社会）をどのように転換させることで排除を解消するかなのである。この点でも、「所与性のドグマ」に囚われた社会像の転換が不可欠と言わねばならない。」P33～4

「本書の各論考には、タイプの異なる労働現場や生活現場、職業的社会化の過程でノンエリート青年が編み出す「社会技法」がちりばめられている。構造改革時代を生きるノンエリート青年の経験蓄積としてそれらをとらえ返すべきこと、今と異なる相貌を備えた社会形成に向かう一つの地盤たして位置づけるべきこと、を主張したい。」P34

このように、社会像の転換、社会形成が不可欠となっているが、そこに行きつくために、「ノンエリート青年が編み出す「社会技法」」を探り出すことが、この本の中心的アプローチになっている。その際、次の指摘は興味深い以上の課題をはらんでいる。

「今日の青年層の多くをとらえている広い意味での貧困や窮迫（抑圧）が、問題の規模や根深さにふさわしい社会的異議申し立てを引き起こさないのはなぜか（若者はなぜ怒らないのか）、貧困な状況が各人に受容されてしまうのはなぜか、といった点についても十分な解答は得られていない。」P4

このほかにもいろいろのアプローチがあろう。たとえば、移民問題（外国人労働者問題）、国際的な労働者問題などを視野に入れた検討もその一つだろう。

それは、日本社会が、世界的に見ると、全体として世界の上層を形成していることをどのように考えるか、という問題でもある。

また、1980年代から広汎に問題化されつつも、依然として解決されず、また課題意識としては、第二次的位置にある、「働きすぎ」問題、ライフスタイル問題ともからませる必要があるだろう。

また、こうした青年層にとって、学校教育がどれだけ有効で、何が不足しているのか、を問う必要がある。それだけでなく、学校教育が彼らにとってマイナスの役目を果たそうとしているのではないか、という角度からのアプローチも必要だろう。

概して、今日の日本の学校教育は、1980年代以前、本書の用語でいえば、開発主義時代に適合的であり、それからの逸脱をおさえこむのに必死である。全国学力テストなどは、その典型だろう。そして、それらには、近年「構造改革時代」的色彩が加えられつつある。

また、大学への社会人入学などの微増がありつつも、「働く一学ぶ」の並行システムは基本的には未熟なままであるが、それをどう構築していくのか、という課題も視野にいれなくてはならない。

それらにかかわって、「標準」からの「逸脱」というとらえ方に対抗して、本書の「第二水準」を読み取ろうとする志向は興味深いが、それが事態の打開と今後の社会像形成に、どういう点で有効なのか、有効でないのかなども、考えていく必要がある。

## 53. 人生の模索

2005年7月24日

人生後半期創造を始めつつあるみなさんとともに

東海「非行」に向き合う親の会でのワークショップと語り合い

7月17日 東海「非行」に向き合う親の会（略称ひまわり会）で、ワークショップ「自己発見・他者発見・つきあい方発見」を行なう。私がそこでの多様な出会いで発見したことを記そう。

1) まず、この会は、子ども・若者のことを語りあうことを通して、人生後半期にはいりつつある親たち自身の生きかた・人生創造を語る会になっている、ということにかかわってである。そして、多くの方々が、「非行」をきっかけに、真向から創造的な生き方に挑んでおられる。その意味では、決して「暗い」会ではなく、「明るい」会である。無論、「重さ」「緊張」をふまえたものではあるが。そして、いろいろな難しい体験をするなかで、一皮どころか、二皮・三皮むけたすばらしい方々である。

2) 気づいたことの一つは、「非行克服」「非行に向き合う」という表現が多いことである。それは参加者自身がそうであるというよりも、タテマエとしての言葉のなかにしばしば登場してくる。会の名称もそうである。

そこで、「病氣」に対する考え方に二つあることを思い出し、そのことを二次会で発言した。つまり、一つは「病」を闘い克服すべき相手として考え、場合によっては切除・消去する方法をとるものである。もう一つは、「病」は、何かのバランスを崩したことの表現・きざしであり、「病」に「感謝・愛」しつつ、「病」といっしょに生きつつ、バランスを回復していこうとするものである。

「非行」も同じではなかろうか。後者のとらえ方は、何かバランスを崩すようなことがあって、それが「非行」という形で表現されたのであり、それをきっかけに豊かな関係をつくり、新たなバランスを築き上げていく営みが求められている、というものである。だから、「非行」に向き合うといったものより、「非行」につきあう、「非行」をきっかけに、何か新たなものを発見・創造する、という流れを大切にしたい。

3) この会に集う親は、思春期のわが子をもつ方が多いのだが、思春期は、これまで保たれてきたバランスを崩し、新たな関係・自立を築き上げ、新たなバランスをつくるためにチャレンジする時期である。そのために、誰でも多様な形態をとって、バランスを崩し、新たなバランスを創造していくのである。そこには、当然「親離れ」が含まれている。ところが、親の「監督不行き届き」を追及し、親の一層の「監督」を要求する風潮が根強いし、そうしたことにあおられて、親も過剰に「自己責任」を感じ、子どもが自らの「監督」下にもどって来ることを願う構図さえつくられる。この時期は、そうしたありようから抜け出ることが求められる時期な

のである。

4) わが子のことで困惑するなかで、必死に「がんばる」という動きに向かう人も多い。むしろ、そのほうが多いだろう。ときには、「わが子は今はわかってくれないが、私が一生懸命やっていたら、親の背中をみて、いつかは立ち直ってくれるだろう」という発想さえある。その息詰まるような「誠実さ」が、子どもに圧迫感をあたえていないのか。親が立派すぎて、逆効果になってはいないのか。「正しさ」を追求することが、逆に、子どもの「居場所」を閉ざしてはいないのか。などといった素朴な疑問が生じる。だが、そんな疑問は「叱られる」対象になるのかもしれない。

5) 子どもが思春期にある親たちには、人生後半期をどのように生きようとするかという問いのなかにも居る人々が多い。場合によっては、子どものことで必死なのに、自分のことなどはかまっておれない、といわれるかもしれない。しかし、「子は鏡」ではなかろうか。親のありようをよく映し出していることがある。

だから、親が親自身のありようの新たな創造に向かうとき、子どもも「自分なりのペースで、自分の生き方の新たな創造」を肯定的に展開できるのではないだろうか。そこに、親の生き方創造と子どもの生き方創造とのハーモニーが無意識かもしれないが、生まれてこよう。

6) この問題は、とくに夫婦間の問題としてもあらわれやすい。「子ども」のために生きることに必死という形で、後景においやられていた夫婦間の新たなステージのありようの追求を本格的に始める絶好の時期である。子どもが思春期に入るということは、そしてそれはまさに人生後半期創造の時期と重なる。

しかし、ストレーター秩序は、このことを隠してしまう。子どもや若者だけではない。今日の30代後半から50代前半にかけての親たちの大半は、今日子ども・若者たちとは異なって、長年にわたってストレーター秩序を「成功」裏に過ごしてきた。そして、近年になって、その秩序の縮小・崩壊のなかで、自らの新たな生き方創造を「強いられる」ことが多くなってきた。その「強いられる」ことをきっかけにしてもいいし、「強いられる」のがいやで、積極的にそのことに向かっていってもいいのではなかろうか。しかも、それは「ストレーター秩序」が要求する「ガンバリズム」ではなく、ゆったりと多様な世界・人々との出会い・共同作業のなかで、試行錯誤的に展開していくものだろう。



2010年9月17日

## 困難を抱える若者への対応・・・生活指導学会での討論

9月4日の日本生活指導学会大会課題研究Aは、様々な困難を抱える若者への支援・対応を考える分科会だった。

日本には、高校中退者／中卒者がかなりいる。そして、かれらの多くは、職につかないつけないまま、困難を抱え込む状態から抜け出しようがない状態にいる。そうした若者をサポートする制度は欠落しているか、あるとしても大変貧弱だ。

たとえば、高校生活に対応できない若者に対して、退学する/退学させる対応しか考えられない高校関係者は多い。そうした高校生の多くは『行き場』のない状態におかれる。結果的に「ひきこもる」しかない、あるいは「どこかにたまる」しかない状態に追いやられる。そして、何か「問題」を引き起こすと「自己責任」になる。そして結果的に退学に追いやられる。

そうした若者たちの『受け皿』は少ないし、サポートする人も少ない。あるとしても、かなりがボランティア的に対応になっている。だから、高校を含めて、この世代の若者が関わるところは「福祉」的機能を果たすことが、否応なく求められる。

「高校授業料無償化が始まり、これまで授業料未納者で退学を余儀なくされていた生徒が学籍を残すようになった」ということを、ある参加者が発言していた。そうしたなかで、高校は生徒への福祉的機能を果たす必要が出てきているが、そうしたことへの準備態勢がないので、あわてる事態が広がっている。

この時期の若者には、「教育を受けよ、さもなくば、就労せよ」というのが、これまでの施策であり、人々の意識もそれに引きずられていた。しかし、かなり以前から、それが非現実的であり、むしろそれが問題を生み出してきた。にもかかわらず放置されてきた。

最近になって、「ひきこもり」「ニート」という形が広く存在していることが認知され、また、新卒一括採用システムが廃止縮小されるなかで、その結果でもあるが、非正規雇用の増大があり、社会問題化してきている。

にもかかわらず、出されてきている対応が、従来の枠組みを前提にして、学校か就労かのいずれかに「入れ込む」ことを、長期的にではなく短期的目標にしてしまい、それができないと、若者自身の自己責任にする、そのサポートとして、いろいろな施策が出てきている。そうした意味で構造的な展望をもつ必要がある。

この分科会で、問題提起者でもある高橋一正さんが、これらの若者への対応として、教育／福祉／医療／労働の四つをあげたことが重要である。

それとかかわって、分科会討論では、学校／諸施設・サポート組織が、どういう労働形態に適合した教育／生活を、若者にさせているのか、たとえば学校・施設での「模範生」が、どういう職業に適合しているのか、検討してみる必要がある、という問題が出てきたのは、興味深い。

そうした意味で、広い意味での職業訓練を視野に入れた対応、そうしたことと、教育／福祉とを関わらせて考える必要があろう。

なお、この問題を考えるとき、日本の学校が、専門分化された学術知識の伝達と習得を基本とし、高校は普通高校を基本とし、企業も学校で習得してきたことを「あて」にしないで、新卒一括採用し、『就社』後の企業内教育で対応するというありようにメスをいれる必要がある。実業高校、職業訓練の位置づけと内容の再構築が求められよう。

2012年5月25日

人生で大切にしているもの 看護大学授業

※ 沖縄県立看護大学の「教育学」の授業でのことである。

今回の授業は、「人生で大切にしているもの」に関わった二つの活動をし、討論した。

事前予習で、「私の人生にとって大切なもの」を2つ書いてもらった。

それらの一覧を紹介しよう。

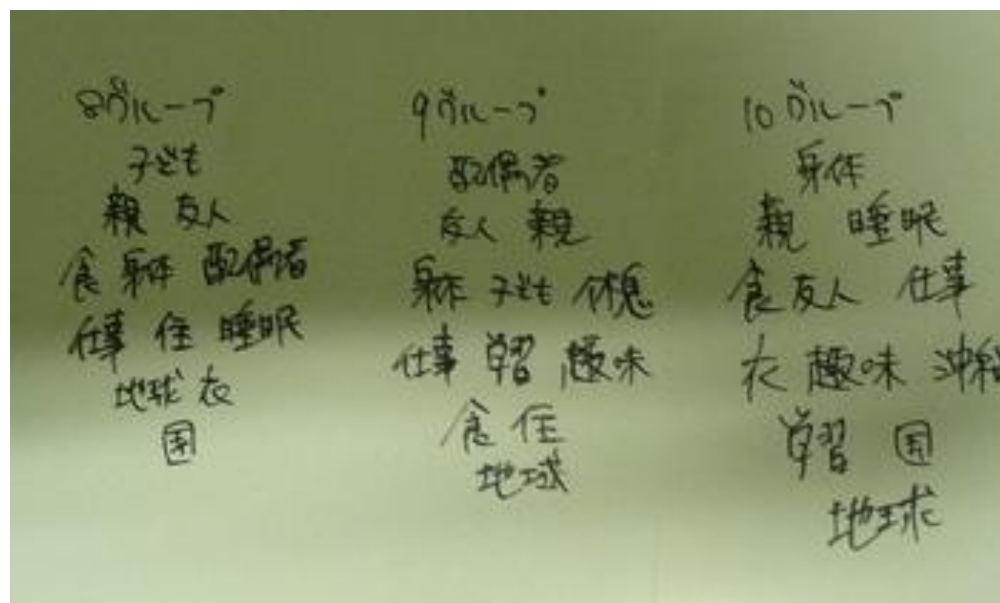
家族（含む 祖母・配偶者など）	20
人間関係（含む 人・人とのつながり・親しい人・身の周りの人・ 自分と関わってくれる人・人の支え・自分に関わるすべての人など）	15
友達・仲間	15
愛・恋愛・彼氏	3
お金	19
食べ物（美味しいもの・甘いもの・リンゴ）	3
時間	6
幸せ	2
楽しみ・楽しく過ごすこと	2
音楽	2
衣食住 服 経験 趣味 思い出 健康 命 夢 素直な心 信仰 自分に関するすべてのもの	各1

社会人入学生を除くと、ほとんどが20歳前後だが、受講生以外も含めたその世代の平均的特徴なのかどうか、よくはわからない。人間関係が圧倒的に多い。お金もかなり多い。他は多様だ。社会や自然にかかわるものは登場しない。

これをもとに、一人一人がグループ内で、『現在』と『10年後』で、大切にしていることについて語りあった。

その後、「人生何に価値を置くか」で17枚のカードのランキングを行った（写真参照）。

実に多彩なランキングが登場したが、やはり、親・



子ども・友人といった人間関係が上位を占める傾向があらわれた。看護学生だけに、身体を上位に考える学生

も多かった。沖縄・地球・国といったものは低かった。

これらの活動と、それにもとづく討論を通して、多様な人生についての考え方を知り、自分なりに「人生」の考えを深めようと言うのが一つのテーマだが、そうしたことを考えるきっかけになっただろうか。

2012年9月11日

## 若者の人生創造 生活本8

※ 「生活本」とは、中川清「改訂版 現代の生活問題」放送大学教育振興会2011年のことだ。

「第12章 若者の「生きにくさ」と生涯デザイン」は、若者の生き方・人生の現代的特徴にかかわって、注目して考えてみたくなる記述が並ぶ。

「かつての青春と対比すると、21世紀の若者たちが置かれた状況は大きく変容している。すでに社会はどこまでもできあがってしまっているかのようである。見通しのない乱暴な生き方は受け入れられにくい。親の地位を乗り越えることはもとより、維持することすら困難になりつつある。成長や創造の物語に代わって、無限に繰り返されるかのような遍歴の物語が主流となる。新たな時代の新たな呼称は見出されていない。ポスト近代としかいいようのない時代にあって、過去が新しく未来が懐かしいかのような、いくつもの既視感におおわれる。」P207

私は、この指摘とは異なって、「できあがってしまっている」社会が崩れ、「無限に繰り返されるかのような」安定性を失い、新たな時代のイメージがもちにくくなっている、と考えている。

さらに紹介しよう。

「かつての若者は、大人というフィルターをとおして成長せざるを得なかった。それに対して消費社会では、若者は消費の主人公、担い手となる。購入の場面では、若者は客として登場しサービスされ、大人のフィルターは一気に後退する。

そればかりではない。消費社会は新しい商品群を膨大に供給するが、具体的な消費はもっぱら若者にまかされる。消費社会は、若者に文化を供給しはしない。若者たちは、供給されるモノを駆使して、若者同士で消費し合うフィールドを、こういってよければ消費文化を形作る。そこでは、大人に向かうエネルギーではなく、若者同士に向かう配慮と気遣いが大切にされる。」P210

「若者が若者であるためには、消費文化を身につけ、そのディテールを自分なりにこなさなければならない。同時に、学校が要請する勉学や規律にも応えねばならない。しかもいずれは、身につけた消費文化を幾分か押さえ込み、脱色しなければならない。消費社会の担い手に祭り上げられるにもかかわらず、今日の若者には、大人には想像できないような多元的な操作と使い分けが求められているのではないだろうか。」P211

「学歴を得て正規雇用につき、結婚して家族を形成し、子供を産み育て働き続けるという、これまで確立されてきた生活モデルが、若者には当然の目標ではなくなり、1つの選択肢に後退する。むしろそれ以上に生活モデルの1つ1つの局面を実現することが、今日の若者には容易ではなくなっている。」P219

そして、これらの点について、他の研究者による有力な主張を、次のように紹介している。

「二神能基は堪りかねて「むしろ、ニートやフリーターを起点とした、彼らが生きやすく働きやすい多様な社会づくりへの発想の転換が必要なのです。それは効率至上主義の社会とは別に、もうひとつの働き方・生き方の社会としてつくられるべきです。」(『希望のニート』)と述べている。

今日の若者が求めているのは、正規雇用を1つの選択肢として相対化し、すでに厚みを持って存在している正規雇用以外の働き方を、生涯にわたる生き方のモデルにまで鍛え上げることはないだろうか。中西新太郎も、正規雇用以外の働き方を「第二標準」と呼び、「第二標準を安定的で魅力的な形態へと転換させる可能性」に言及している(『若者たちに何か起こっているのか』)。」 P217-8

「浅野智彦らは、「自分らしさ」が「単一のあるいは一貫したものではなくなりつつ」あり、自分へのこだわりと場面によって使い分けられる「多元的な自己」とが、二律背反の関係に陥るのではなく、重なり合い共存できる可能性に言及している(『検証・若者の変貌』)。「自分らしさ」の相対化の試みが、若者自身の手で進められているのかもしれない。」 P220-1

いずれも考えさせられる論点・主張だ。

私もこれらの問題について、主として「人生創造」という視点からいろいろと語ってきた。だが、これらを語る時、留意しなければならないことは、今の若者は、「今までとは異なった状況・課題に直面している」というメッセージのつもりが、「今までになく大変な状況・課題に直面している」というメッセージにすり替わって受け取られかねないことである。たんに大変だというのではなく、現代の課題の特質を明瞭にする必要がある、ということだ。

もう一つは、若者固有の課題と、現在を生きる多くの世代に共通している課題とを混同しないことである。たとえば、「先が見えにくく大変だ」と言うのは、若者世代だけでなく、30代40代でも、さらにそれ以上の世代でも、共有することが多いことだ。

また、現代的特質を明らかにするときに、事実としての特質と、今後の展望についての特質を分けて検討する必要がある。

こう書いてくると、若者の生き方について、これまで色々と書いてきた私自身も、より鮮明に書くべきことが多そうだ。これまで、従来のストレーターコースが狭められてきた事実を指摘しつつ、若者自身が自らの人生を創造していくことに力点をかけて論じてきた私だが、より踏み込んで、より具体的に語るべき段階に来ているように感じる。

本格的に論ずることは今すぐには難しいのだが、いくつかのポイントを並べておきたい。上に紹介した諸提起への私なりのコメントも兼ねてのことだ。

・ストレーターコースが狭められたとしても、それ以外のコース的なものを想定するのだろうか。中西さんの

「第二標準」論については以前論じたことがあるが、そうした提起について、より鮮明な提起が私にも必要なようだ。

・本記事の冒頭の引用にあるような「青春」とか「青年期」といった概念を、今日ではどうするのか、という課題がある。

・「人生創造」といつてきたが、それをさらに踏み込んだ議論をどういう風に展開するのか。

・変化とか流動性が激しいことが予想される中で、従来のような「人生計画」の立て方のありようも変化しそうだが、そういうなかで、「人生創造」をどう提起するのか。

・「人生創造」は、関係性・つながりのなかで展開されるのだが、そのありようについて、さらに踏み込んだ提起がもとめられているようだ。

・「社会」のありようと個人のありようとを、どうつなげて、あるいはどうつなげないで、「人生創造」を構想するのか。それは、経済「成長」を継続的に追求しようという流れに沿った構想と、経済の「定常」ないしは「縮小」を前提にした構想、あるいは、ガンバリズムとか努力主義とかいったものを前提にするのか、そうでないものを前提にするのか、といった生活姿勢とか倫理とかいったものとも結びつく。

本書の提起、あるいはしばし前に連載して紹介した宮本みち子編著のなどの提起、あるいは広井良典の著書などは、わたしにとっても示唆するところが多い。こうしたものから学びつつも、さらに多くの人々が事実として模索試行している事実などからも学びつつ、この数年間で、私なりのものを次のバージョンへと推し進めたいと考えている。

## 54. 人生おこし・若者人生物語

2007年5月17日

乾ほか「明日を模索する若者たち：高校3年目の分岐」、Inuiほか「Comparative Studies on NEET, Freeter, and Unemployed Youth in Japan and the UK」を読む

最近、贈呈された二つの論を読んで考えたことを記そう。

前者は、東京の違いのある二つの高校卒業者についての追跡調査の3回目の報告である。このように、卒業後の変化を同じ対象者をインタビューによって追跡する調査は貴重なものといえよう。近年の研究調査では統計的なものが圧倒しているなかであって、出色の研究といえよう。この世代の若者の人生模索の実相を把握することは、今後の研究と実践の深化にとって、きわめて有益であろう。それだけに、示唆するものが大きく、私自身の思考にいくつかのヒントを与えてくれた。できれば、今後もこの研究を継続していただきたい。調査には大変な困難がともなうが。

後者は、「ニート」「フリーター」問題をめぐっての、イギリスと日本の共同研究というこれまた大変貴重なものである。国際共同研究は大変な困難をとめない、未熟な面が多いなかで、この研究は一定の歴史的蓄積をもつほどに有益な報告となっている。これまた今後のさらなる展開が期待される。とくに、日本の場合、施策やマスコミ論調が、欧米の動向を参照しているようであり、その実相把握をしないで、ときには歪めて、自己の政策を正当化したり、若者バッシングをしたりするなかで、こうした共同研究は重要な意味をもとう。

両論から示唆を受け、考えたことは、大きくいって三つになる。各々について箇条書き風にのべていくことにする。

1) 若者たちに対して、教育・学校がなしえたこと、なしうることは何か。

この問いかけについて、両論ともに直接的な調査や言及はほぼない。それだけに意味深長である。かつての日本の学校でなら、大多数の若者にとって、「学校－仕事」は、直接的なつながりをもっていた。今日では、特定の職業に直結した専門学校・実業高校・技術系大学などに限られている。あるいはまた、超エリート大学で「総合職」などに送り込むケースに限られている。この場合は、私のいうストレーター秩序を勝利的に歩むものだけの、今や「希有に近い」といっていいケースである。

新卒一括採用システムが大幅に限定されるなかで、改めて学校の「学校－仕事」にかかわる位置・役割が問われている。「学校－仕事」の過程で、かつてのような単純接続の道を歩まない大多数の若者にとって、自らの人生創造職業生活創造にとって、学校で学んだことのもつ意味は限りなく小さくなりつつある。

そうしたなかで、前者の論文が示す「地元つながり」は、高校同級生間のつながりとしても展開しているので、学校という場でできた「つながり」が「貢献」したといえなくもない。しかしながら、学校の意図的な教



育活動として展開したものではない。学校それ自体が意図的に教育したものとして、若者の職業創造人生創造にいかにか寄与しているのか、いくのか、という問いそのものが、希薄な存在となっている。小学校はいうまでもなく、中学校でも、そして現実につきあたるケースが多い高校にしてもそうである。

2) この研究は、直接的には若者たちの状況把握を目的としている。とはいえ、教育学研究として展開している以上、1) で述べたような学校・教育の果たしている役割などを問うことにもつながってくる。さらにこの研究自体が、若者の生き方働き方にいかなるコミットをしていくか、若者自身がどのようにそれらを創造していくのかの提案へとつながっていく。たとえば、「格差社会」のなかで、どう提起していくのか。「第二標準」をたてるというありようも一つであろう。また、困難な労働状況を打開していくための方策を提示していく、打開していく動きを支えていく営みを提案していくこともあろう。

近年の教育学研究は、こうした問題に対して未熟な状況が続いているのではなかろうか。生き方にかかわる教育というと、ともすると、道徳的なありようが前面に出てしまう。あるいはリアリティが弱く抽象的な提起になり、結果的に先送りになってしまう。こうした状況のよとの学校では、たとえば近年のキャリア・エデュケーションがかなりトップダウン式に出されていることに対して、それにかかわる具体的提案・対案を出していくということがかなり弱い状況が続いているのではなかろうか。

その点で、第二論文が、従来の働き方から「はずれる」、そこに「戻る」問題に言及しているのは注目される。私がいつてきたストレーターのありようが数的に限定されてくるなかで、従来の学校がストレーターづくりに集中して取り組んできたために、大量のミスマッチ状況を生みだしてきたなかで、この問題に実践的にどのようなアプローチするかは重大な問題である。「はずれる」「戻る」問題はそれに関係が深いだろう。

3) これらの研究は、舞台としては東京、ないしは全国平均を選んでいるが、それらの社会的状況とかなり異なる様相を呈している沖縄で、研究を展開するとすれば、どうなるのであろうか。東京など大都市を対象にした研究を、ただ応用すれば、日本中について考えられるというものでもあるまい。全国データ分析をされるが、そのリアリティとしては大都市圏をイメージするというのが強い。

しかし、データの的にもかなり異なるものを提出し、生活実感的にも人間関係的にも異なる様相を強く呈する沖縄をどうみていくのか。そして、それを日本における例外的なものとするのか、あるいは日本における多様なありようのなかでも、鋭く異なる問題を提出しているところと見るのか。それは日本内部だけでなく、地球規模で考えて行ったらどうなるのか、といった問いが生まれてくる。

たとえば、年収でいうと、東京での200万円と沖縄での200万円のもつ意味は大きく異なる。都市的豊かさは、金銭に翻訳して考察しやすいが、沖縄での豊かさは金銭だけではかることはしにくい。

また、沖縄の失業率・開業率・廃業率の図抜けての高さを、どのように見るのか。その際に、東京基準で評価するような発想をいかに卒業しながら、独自の創造的な把握を展開しつつ、それを逆に大都市での把握にはねかえしていくような発想があつてよいだろう。

また、ストレーター秩序が40年にわたって蓄積している大都市地域と、ストレーター秩序が80年代後半に一般的傾向になりはじめ、いまだ「完成」を見たとはいきれない沖縄とでは事情が異なる。

社会（関係）資本、あるいは人間関係資本ということであると、まったく状況は異なる。

※ 両論文ともに、ジェンダーを注目した分析をおこなっているが、それらのものが示唆するものをどう読み取るのか。社会的に女性不利の状況がまだ構造的に存在している、という指摘をまずしているわけだが、それに加えて女性のもつ人間関係資本的強さというものをどう考えるのかも見逃すわけにはいかない。とくに沖縄ではそのことが重要である。

このような意味で、沖縄を対象にした研究、そして沖縄と東京を含むそれ以外の地域との比較ということは大きな意味をもつ。と同時に、その研究調査枠組みを東京基準にすること自体も問わなくてはならないだろう。沖縄基準と東京基準の双方を視野に入れた枠組みづくりというものがあっていいのではなかろうか。そうした営みを放棄してきたことが、「本土進んでいるー沖縄遅れている」構図をつくりあげてきたのである。

こうした視野は、もう一つ、世界の「中流」ないしは「上流」としての日本を相対化してみていくことにもつながる。また、地球的規模で人々の生き方を問い直す動きとのからみも視野に入れてこよう。

※ その点で、今、団塊などの50代後半以降のみならず、50歳未満、とくに20～30代の若者たちが沖縄へと大量に移住し、そこで、「自己実現」をはかろうとしている、あるいは「癒し」ともなう生き方を求めようとしていることを、どう考えるか。そこにはオルタナティブな人々の生き方創造の地球規模の大きな流れと、底部で結びついていると、私は考えている。

その点では、第一世代フリーターと第二世代フリーターの違いに言及している第二論文のいくつかの叙述は注目される。今や第一世代フリーターの存在が忘れ去られそうな状況にあるが、そういう感覚をもつフリーター、かつかれらは起業的雰囲気をともなっているが、かれらが沖縄に多いということも注目される。

2007年5月24日

## 人生創造物語in沖縄

## スタートへの想い

沖縄にNターンして、実に多様な方々と出会う。その多様さは、生き方の多様さでもある。まず私同様、人生後半期にある方の生き方にすごくひきつけられた。そして最近、若者の生き方にもひきつけられるようになった。近隣の方、集まりで出会う方、そして私の授業にでてくる若者たち、である。ルールによって生きる若者の数が激減するなか、創造的な生き方をする若者たちがすごく増えている。たとえば、自分で学費生活費を稼ぎだして、大学にきている学生が結構いる。愛知にいたときには、想像すらできなかったことである。

東京都立大学（首都大学）乾彰夫ゼミの大学院生たちが、東京の10代末から20代はじめの若者についてのすばらしい報告をだしているが、その東京の若者たちとはずいぶん異なるありようをしている若者たちが、沖縄には結構多い。もともとの沖縄の若者たちだけでなく、沖縄に移住してきた若者たちにも多い。

こんな人生後半期の人たち、若者たちの多様で豊かな生き方を書きしるしたいと急に思うようになった。しかし、ナマのままで書くとプライバシーにかかわるので、小説風を書いていこうと思う。まずは下書き風ではあるが。

2007年5月24日

## 若者1 榕樹 工業高校→キセツ→大学入学

榕樹は、沖縄の離島に生まれ育つ。兄弟姉妹は4人。父は設備関連業で働く。職人気質で黙々と働くが、仕事と息子には厳しい。母親は、兼業の農業仕事やパートで働く。

一つの学級しかない小学校中学校時代、榕樹は体が小さいため、下の方の位置に甘んじ、同級生にもこきつかわれたり、いじめられたりしてきた。グチをいいあえる同級生もいることはいたが、じっと耐えるタイプであった。学校に行きたくないと思っても、自宅にひきこまれるような部屋はないし、父親の厳しい躰で、とにかく学校には行った。

高校は、同級生たちとは離れて沖縄本島の工業高校に進学した。叔父の家に住まわせてもらうが、それでも片道13kmの自転車通学をした。

工業技術の習得は、コツコツと地味にやる自分の性格にあうと思ってはいたが、将来工業関係に就職するというような見通しをもっていたわけではない。「つきあい勉強」という感じであった。それでも工業関係の実習科目は、モノをつくっているという感じで楽しかった。ほかには英語の先生は、教科書通りに進行すると生徒がついてこないことを知っているせいか、世界のいろいろなことを話題にして授業をしたし、たまにくる外国人教師も、アジア系でとてもおもしろい話をしてくれたのが、印象的だった。

それと、中学時代にクラスのなかで同じような位置にあった生徒が他にもいることを知って、なぜか安心感

めいたものをもった。といっても、自分同様かれらも人づきあい下手なので、それほどつきあったというわけではなかった。

それでも、自分なりのものを身につけたいと願っているいろいろ探していた。ある時、学校に比較的近いところのバンド教室勧誘のチラシを目にした。そこに顔を出し、練習に参加した。どのパートをするか選ばなくてはならなかったが、ほかのメンバーとの関係もあってギターをすることになったが、初体験であった。これまでのクセで、「いや」とはいえず、黙々とギターで3年間を過ごす。それでも、練習をしていると、何か体がうずくような感じ、ふるえるような感じがあって、満ち足りた気分になったりもした。

3年になって進路選択の際に、音楽関係の可能性を探ったが、親の経済的支援は期待できず、自分で切り開くしかなかった。学校がいろいろと就職紹介をしてくれるが、これとってつきたい仕事があったわけではなかった。それでも先生に勧められたので、一つ面接までいったが、自分の優柔不断さのせいだろうか、決まらなかった。

卒業間際になって、とにかく働いて資金をためようということで、愛知県の自動車工場での季節工に行った。大変きつい仕事だった。部品生産ラインで、70秒間で12個の作業をこなすといったふうで、なかなか大変だった。大変だから、臨時の仕事でありながら、一日あたり一万円近くの手当てが出るんだろうなあ、と思った。いっしょに季節工になったもののなかで何人もが途中で消えて行った。かわいそうだったのは、同じ高校からいっしょにいった女性だった。在学中は学科も違うので、話をかわすこともなかったが、季節工の職場で顔をかわすとあいさつぐらいはした。その彼女の顔色が目立って暗くなるのに気づいた。彼女は高校在学中からとてもまじめで、先生たちのお気に入りだった。でもそのまじめさがよくないような気がした。しばらくして、姿がみえないので気になっていたが、季節工を紹介したハローワークから電話があって、帰郷したことを知った。あとから聞くと、かなり神経的にまいったらしい。

自分の場合、小学校中学校時代の体験が、我慢強さをつくってくれたのか、とにかく満期褒賞金がもらえるまで働いた。そして、帰郷したときには、飲み屋でバイトした。もう一度季節工にいったが、合計1年半で300万円になった。その間、今の自分の実力では音楽だけで生きていける見通しは困難であることに気づいた。もう一つ何かを獲得しなければと考えた。音楽のなかで英語に親しんだこともあり、高校授業で国際交流にも多少の関心をもてたので、その方面の大学か専門学校進学を検討した。そのなかで、AO入試システムをもち、授業料も比較的安いある大学に関心をもち、その大学の国際交流学部に進学した。父親も、何か言いたげではあったが、自分がためたお金でいくこともあってか、何もいわなかった。

貯めた資金と、バイトで何とか4年間やっていけそうだが、入学後の人間関係がちょっと心配であった。消極的なタイプだし、年下ばかりの世界でうまくやっていけるかどうか、ということである。しかし、意外といろいろな人生経験をもって入学している学生がいることを発見した。2年余分な道を歩んだ自分以上に、もっといろいろな道を歩んだ人がいたことにはちょっと驚いた。

入学オリエンテーション期間に、一見体育会的だが、とてもやさしく人なつっこい顔をした2年生に、新設サークルへの参加をよびかけられた。新設なら、タテの人間関係で苦労なくていいし、と思ってそこに加入することにした。実は、その2年生も、テレビドラマのような人生をもっているやつで、話にどんどん引き込まれた。一年生の自分をこきつかう感じではなくて、自分でどんどんやっていく。あんまりやるので、「先輩、

僕ができることがあったら、声をかけてください」といって、いくつかの仕事をする。これまで男性がほとんどの人間関係のなかで生きていたが、ここではかなり女性がいたので、それが新鮮な感じを与えてくれた。

5月になって、そのサークルの合宿があり、サークル員相互のはじめての本格的な出会いをした。その際に、一人の講師がいた。おじいさんであった。榕樹は、自分のおじいさんを思い出した。厳しい父親と対照的に、いろいろな話をしてくれ、自分の話を聞いてくれる祖父だった。だけど、中学生時代になくなった。その祖父を思い出した。

2007年6月11日

## 若者2 起業家への道を歩む毅

毅は、中学3年の時に父親がリストラにあい、高校時代から居酒屋のアルバイトで働く。その働きぶりを店長も高く評価し、3年生になったころ、このままここに就職して店長にならないかといわれる。気をよくしてそこに就職し、店のきりもりをする道を順調に歩いていく。常連客の評判もよく、ずいぶん年上の客から身の上相談を受けたりもするほどであった。実際の年齢よりも上にみられていたのだろう。その耳学問のなかで、たくさんのことを学んだし、人脈も増えていった。耳学問も数をこなしていくと、ちょっとしたアドバイスもできるようになっていく。

毅自身としては、店に働く人の半数以上が年上で、気遣いで疲れ気味であった。そんなこともあったし、このままの客商売をずっと続ける以外に自分なりの道があるのではないか、と思うようにもなった。その道はまだはっきりしないが、コンピュータ関係、情報関係への関心は以前からもっていた。それもただハードをどうするかではなくて、人間関係を発展させるようなソフトを活用して、人間を動かすような仕事はないか、とやや空想的に考えていた。

この店で3年ほど働いて、チェーン経営幹部からも高く評価され、これまでよりもずっと客の多い「看板店」の店長の話が持ち込まれた。大変うれしい話だが、自分には早すぎるという感じがしたのと同時に、今引き受けたらこの道をずっと歩むことになってしまいそうに感じた。その前に自分なりの道をあらためて考え追求するために、その話を断り、大学進学を考えた。情報への関心を活かしつつ、起業的感觉を身につけようと、経営情報学部を選んだ。これまで貯めた資金は250万だが、アルバイトで足していけば、なんとかなるだろうと計算した。22歳入学となった。

入学後、大教室授業はとても退屈であったが、ほかの学生のいいかげんな受講態度には腹がたつこともあった。そして、ただひたすら教授の話を聞いているだけではダメだと考え、授業内容が印象的だった斎藤教授のところに飛び込んで、追っかけをして、いろいろな研究会にでかけたり、仕事を手伝ったりした。年齢が他の学生より上であることもあって、先生は大切にしてくれた。

この大学は2年生から専門ゼミに入るシステムになっていたが、斎藤ゼミに所属した。斎藤ゼミでは、実際的感覺を身につけることを大切にして、実際の中小企業経営者と、その会社の企画を若い感覺で提案することを軸にすすめられていた。そこで、若者向けのソフト開発を中心にするエコテック社が自分の関心に近いと考

え、そのチームに入って、商品企画提案に参加した。しかし、会社側は、若い学生たちが、若者を「代表」してどんなことに興味をもつかに関心を寄せ、経営そのものに関心をいなく毅とはズレていた。他の学生が結構生き生きとかかわっていたのとは対照的に、毅はちょっと疎外感をもった。

3年生になって、夏休み時期、起業家として大変魅力的な井上さんの会社にインターンとして1ヶ月つとめた。ここでは、いろいろと学ぶことが多いし、毅とも年齢の近い若手社員のなかで、関心をともにできる安田さんと意気投合した。ソフト開発を、人件費の安い沖縄で展開するという発想ではまずく、沖縄から発信するような独創的な展開ができないものかという論議を、気概大きく議論した。

3年生終わりになって、卒業後の進路を考える時、毅は起業することを最終目標におき、それに必要なことを学びきれているかどうか、また、起業への助走をどうするかを考えた。結論として、起業分野を限定して助走としてのネットワークをつくることと、その分野に近い大学修士課程でさらに学ぶことを考えた。斎藤先生の追っかけのなかで知り合った、近隣大学の村越先生のところで修士課程を送ることにした。村越先生は、近年急速に事業拡大しているが、さまざまな問題が山積している福祉分野の経営論に焦点をあてて研究していた。毅の祖父が介護サービスを受けていたことなどもあって、福祉分野には多少の興味をもっていた。

村越先生に相談したところ、大変歓迎してくれ、おまけに大学の研究所のコンピュータ関連非常勤職員にならないか、とまで声をかけられた。

こんなふうにして、毅の起業家への道は少しずつだが、進みは始めている。もう年齢は26歳になっており、修士課程を終える28歳までには、なんとかメドをつけたいものだと考えている。

2007年6月28日

### 若者3 東京の先端企業を退社して沖縄に住みはじめた佐藤雅

雅（みやび）は、「東北の都会」の堅実な職業の親のもと生まれた。ほかに第一人であった。親の躰は「自分のことは自分が決めなさい」といいながら、「目に入れても痛くない」と親自身がいうほどの「箱入り娘」風の育て方であった。それでも、中学高校はスポーツ系部活にはまりこみ、惜しくもインターハイ出場を逃すくらいのレベルにまで達していた。

高校卒業後の進路についても、親の勧めでブランド大学の国際関係に強い学部に進んだ。大学在学中の友人たちと話すなかで、自分の「箱入り」風が気になりはじめ、親には相談せずに外国への短期留学をした。そのときが、親との本格的衝突のはじめであった。

卒業後の進路も、親元を離れたくて、東京の投資系会社に就職した。親は2～3年で帰郷し、だれかいい人と結婚することを願っていた。

仕事は最初地味な書類作成が中心であったが、何かに挑戦しなければ、このまま数年勤めて、「寿退社」的な流れになりそうな気配を感じた。そこで、社内試験で、投資業務にたずさわる部門への転属を果たした。そこでの業務は激しいものだったが、部活で培った「負けじ魂」で、なんとかついていけた。そして、数少ない女性社員のなかでは、そこそこの成果を出すほどにいたった。

その部署に3年ほど夢中になって勤めた後、投資関係ではあるが、異なる商品部門へと移ることとなった。移りたての時期を越え「慣れてきたなあ」と思った5月に、ふと自分の人間関係が気になりはじめた。業務上のつきあいをのぞいた個人的なつきあいが大変少ないし、心打ち明けて話しができる人は無きに等しいのだ。そう思うと急に寂しさを覚えはじめた。あるとき、机の前でボツとしていたことがあり、同僚から「どうしたの」と声をかけられ、「体調でも悪いの？ 早めに健康管理をしたほうがいいよ」といわれた。そこで、会社ビルの2階にあるクリニックを訪れた。「鬱」の疑いがいわれて、専門医に赴いた。専門医は「働きすぎだから、思い切って休んだら」といわれた。

脱力感が雅を襲った。きちんとしないではおられない雅は、当座の仕事の段取りをしたうえで、会社に一週間だけの休暇届を出した。帰り道、いつも何の関心ももたなかった旅行社のパンフレットが気になり、店に入った。そして沖縄フリープランを即座に申し込んでいた。それまで沖縄とは縁がないどころか、行ったこともなかった。

沖縄では、自由に歩き回った。町並み、リゾート地の海岸、熱帯植物園、水族館など。夜、ホテル近くの居酒屋に立ち寄ってみた。東京とはまったく異なる雰囲気驚いた。一人飲んでいると、3～4人の女性グループに声をかけられた。どこかの土産物屋の店員アルバイトをしているグループらしかったが、そのうち2人は、本土から来て半年もたない人だった。レンタカーで北部か南部の田舎をまわることをすすめられた。翌日早速まわった。東京とは全く違っていた。どこか東北の田舎の雰囲気と近いものを感じたが、太陽光線の違いと海と空の青さが印象的だった。

東京に戻って専門医のところに行って、沖縄旅行のことを話した。「あなたのケースは半年はゆっくりしたほうがいいよ。沖縄がとてもよかったらしいから、沖縄も候補地だね。医師は紹介するよ」といわれる。なにげない会話に思えたが、雅にとっての人生上の意味などは、考えもしなかった。もう少し沖縄でゆっくりするかと、思う。そこで、会社に相談したら、会社は病気休職への対応に慣れているようで、半年間の休職扱いをとってくれた。「それ以上は無理で、退職しかないよ」と念を押されたが。

一週間後、雅は、沖縄の田舎に近いマンスリーマンションに住みはじめた。住みはじめてから、親には連絡の手紙を出した。住所は書かなかったが。

最初はただ時がゆったり過ぎていくのを感じるだけだった。これまでの自分のなかにはないゆったりしたリズムだった。空気のおいしさ、風、光を感じていた。食事は近所の食堂でしていたが、そこのおばちゃんが、沖縄の食材の料理の仕方のコツを教えてくれたので、自分でも少しづつつくり始めた。一週間もすると、時間をもてあましはじめたので、いろいろとしはじめた。ダイビング、三線などにも通った。

気分がだんだん落ち着いてくるのを感じた。そんな折、突然両親が現れた。最初はなんとかつきあっていたが、2日目に、なぜか雅はキレてしまった。親は帰っていった。

こうして2ヶ月余りたって、気持ち的に復職する気分はなくなっていた。5年ほど務めて、貯金がかなりあったので、金銭的にはまだ大丈夫であったが、長期リゾート気分だけで過ごすことに、飽きてきた折、観光地にあるまさに小さな小物屋で話し込むことがあった。その店をしている国山晴美は四国出身の30代で10年ほど前から沖縄に住んでいるという。いろいろと人間関係をもっており、晴美をとりまく集まりにも雅は顔を出すようになった。そこで実に多様な移住者がいることに気づいた。自分と似たケースをもつ人もいた。

紹介された医者への通院はしていたが、「鬱の薬はもう飲む必要はない」といわれた。気分も穏やかな感じになっていた。しかし、東京に帰るとまた具合が悪くなることを恐れた。そこで、リゾート気分のままでいるのではなく、何か手仕事でもしようか、そのきっかけに土産物屋の店員でもしようか、という気分になってきた。ということで、雅はアパートの一部屋を借りた。月全部込みで4万円であった。店員のアルバイト代は月に8万円ぐらいだったが。

店員も長くはしなかった。あわただしさを感じたからだだった。そのなかで、沖縄の素材を使って工芸作品をつくることに興味をもち、国山に相談し、ひとまず彼女の店で扱っているものをつくる工房にいて、修行中の形で働くことにした。そして退社届も出した。

こんな生活が雅の沖縄生活のはじまりであった。

2007年9月3日

#### 若者4 介護―看護への道を共に歩む千春と功二

千春の家は、余裕があるほどの経済力はなかったが、一人っ子ということもあって、親は進学してもいいよ、といていた。千春は家の経済状態を気兼ねして、短大か専門学校に行くことにしていた。専門的な職業イメージはあまりもっていなかったが、卒業後の就職に直結しそうな福祉の専門学校を選んだ。

その学校の同級生の功二は、一年間、アルバイトなどの生活をした後、入学してきたの一つ年上であった。功二は、アルバイト生活のなかで、なにかのワザ・資格の有効性を感じていて、現実の仕事と直結する介護関係の就職を考えての入学であった。それに、功二は、ほんの少しだが、祖母の介護体験をもっていたことが選択動機ともなっていた。

その功二は、入学後も、アルバイトとボランティアの中間的なこととして、高齢者ホームで、週に10時間ほど活動していた。功二に誘われて、千春もそこでボランティア活動をはじめた。最初のうちは、むっすりして、高齢者をそれほど好きにはなれなかった。むしろ、人づきあいの下手の自分には、適度に距離をとってられる高齢者とのつきあいにわずらわしさを感じなかったことがよかったともいえた。

こんな成り行きの中で、二人は同時に卒業し、別々の介護施設に就職した。給料は、各々、10万円くらいで、家を離れて、単独でアパートに暮らすと、経済的ゆとりがほとんどないことが予想できたので、いっしょに住みはじめた。

仕事は、どちらかというと、淡々とこなしていく感じであった。年長の施設職員が、高齢者と親しそうにかいがいしく働いているのを見ると、「いいなあ」とは思いつつ、自分にはそこまでできないなあ、と感じていた。千春はとくにそうであった。それにその施設は、大手チェーン経営で効率性を重視する職場だったので、淡々とした仕事処理は、それなりに気にいっていた。

功二は、実質的に個人経営的な職場で、男性職員が少ないということもあって、経営者や他の職員からかなり期待を受けており、力仕事のなものも含めて、いろいろと要請されることが多かった。



一年くらいたって、二人は徐々に将来進路の、ある程度きちんとした計画が必要だな、と思いはじめ、いろいろと相談しあった。結婚しようという気持ちも芽生えてきた。となると、経済的計画が難しいことが、共通の焦点問題となった。

そこで、今よりずっと高い収入が予想でき、将来的な安定を得るということで、看護師資格をえてみてはどうか、という話しになった。最初は、功二のことだと考えていた千春も、それなら私も、ということ、二人とも看護関係の学校にチャレンジするということになった。二人とも、とくに功二は一般入試にそれほどの自信はなかった。そこで、二人とも秋の推薦入学時期に、社会人枠をもっている学校を受験した。幸い、功二は合格した。失敗した千春は、翌春の一般入試に向けて猛学習をして、功二とは異なる学校であったが、合格することができた。授業料と生活費については、親からの多少の援助、奨学金、アルバイトでまかなう計画であった。功二23歳、千春22歳の時である。

入学直後、千春の妊娠が判明した。双方の親とも相談して、急遽籍を入れ、年末の出産を迎えることとした。そのため、千春は後期から休学することにした。

功二は学校では年長に属していることもあって、級友たちの信も厚かった。若い級友たちの「幼さ」を感じ、「こんなことで、看護師になれるのかなあ」と感じましたが、自分の18歳の時を考えると、「50歩100歩かな」と思ったりもした。

千春も年下の級友と多少はつきあってはいたが、それよりも高校の時から友だちとのつきあいのほうが多かった。とくに休学後はそうで、いろいろと多様な生活をしている友だちのとめどないおしゃべりは、千春の精神衛生の薬であった。すでに出産育児を経験している友だちの存在は、本当に助かるという感じである。

さて、この後は？

2007年9月3日

## 若者5 農業で模索する慎二たち

慎二は、都会育ちで、農業とは全く関係のない暮らしをしていたが、テレビ番組で農業の自給率問題に関心をもったことをきっかけにして、ある地方大学の農学部に入った。授業はそれなりにこなしてきたが、少々ハードに感じたのは、全くの未体験であった実習である。きつくはあったが、それでも、これまで出会ったことのない世界で新鮮さを感じたので、なんとなく輝きを感じ、それなりにこなしてきた。専門ゼミを選ぶ時期になって、自給問題に関係が深いということもあって、熱帯地域の農業を扱うゼミに入った。

就職活動する時期になったが、進路選択にはどうも確信めいたものがもてずにいたため、ずるずると卒業し、フリーになってしまった。そして、少しは興味があった海外での仕事へのとっかかりと考えて、青年海外協力隊に応募し、採用された。派遣先は、南アジアであった。ひくにひけない感じになって、それなりにがむしゃらにやったつもりであった。

任期を終えて日本に戻り、しばしの休暇だと思って、日本各地をまわった。そのなかで沖縄にきた。雰囲気はJICA派遣先と似ているような感じがして、沖縄でしばらく農業アルバイトをすることにした。そのなかで、果樹栽培を軸にして沖縄農業を創造的に展開している喜納さんに出会った。喜納さんと語らううちに、誘われて喜納農場でしばらく働くことにした。

このとき、慎二は27歳であった。おりしも、沖縄農業は、従来のありようではたちゆきにくい状況が広がって、喜納さんのようにベンチャー型農業経営を手探りに展開する人たちがリーダーシップをとるようなケースがあちこちで見られるようになっていた。

その喜納さんのところには、農業高校を出たばかりの優、建築業の手伝いをしていたが、建築業不振のなかでここに来た兼太郎などの「修行中」のものも集っていた。

仕事は大変きつく、日給も他のアルバイトと同じくらいだが、喜納さんの仕事への熱い打ち込みよう、そして、その語りにひきつけられて、みんながんばっているという感じであった。

2008年2月13日

## 沖縄移住の若者の生き方

溝口恵美『働きながら沖縄で暮らす法』（学習研究社2007年）に触れつつ

20代、30代の若者で、沖縄に移住して働いている45のケースをもとに書かれている。さまざまな例をもとにしているので、若者の沖縄移住について考えるうえで、とても参考になる。

読者ターゲットは、本土に今暮らしていて、沖縄暮らしを考えようとしている若者にあてられている。美しい写真入りであるので、沖縄移住を明るいトーンで描くものとなっている。むろん、賃金の低さをはじめとして、沖縄暮らしの「厳しさ」も紹介してはある。事例は、那覇・中部・八重山などが中心である。若者移住者がそのあたりに多いためだろう。玉城など南部地域の事例はとても少ない。この地域には若者移住が少ないとみなされているのだろう。あるいは、働く場所が少なくて、結果的にそうなったのかもしれない。

読みながら、思ったことをいくつか並べていこう。

1) ごく少数を除けば、移住後、2、3年の短期間の例ばかりである。若者だからそうなるのもっともだ。そうした若者が、沖縄と出会い、それまでの本土暮らしとは異なる世界を発見しつつ、「自分発見」していく様子がうかがえる。なかには、沖縄で「癒し」めいたものを得た人もいるようだ。

そうした若者が、この短い体験をベースにして、これからどのような生き方を創造していくのか、そのことに私は注目する。

そしてそのことが、若者本人だけでなく、沖縄にとってどういうことになっていくのか、ということを知りたい。本のなかで、「ナイチャーだから信用しにくい」といわれた体験もでてくる。一時的に滞在するのではなく、一定期間の継続を求める仕事の世界では、仕事を求める若者の姿勢、とくに沖縄と継続的にかかわる意思があるかどうかを、雇い主の側が知りたい気持ちはよくわかる。

その意味で、若者が沖縄に対して、どのようなメッセージを出すのか、さらにまた沖縄に住み続けている人たちとともに、どのような沖縄をつくっていくか、どのような地域おこしをしていくのか、ということに、私は強い関心をもっている。

というのは、若者が住み続けるということは、若者本人だけの問題にとどまらず、沖縄の問題だからだ。

移住生活が1年以上も過ぎれば、この問いへの反応を期待したい。そうでないと、沖縄は、自然や人々はとてもいいのだけど、「賃金は低い」「時間を守らない」「ルーズだ」といったステレオタイプの印象をもって、本土に戻り、そうした言葉をまわりにふりまいていくことになりはしないのだろうか。「沖縄は遅れている」ということの宣伝係になってしまうのだ。

2) 沖縄への移住の仕方にも、多様さがみられるが、そのなかで、あっさりと偶然の結果、「きてしまった」という例がかなり多い。ちょうど、東京などの大都会へ、身体一つでやってきて、アルバイトなどをはじめるスタイルと似ている。そういう若者を受け入れられる「田舎」は、日本のなかでは、沖縄のほかには珍しいのかもしれない。その気軽さを受け入れる雰囲気、あるいは包み込む「やさしさ」にひかれて移住したようなト

ンを感じる例も多い。

そんななか、「南部」に関しては「地域によっては排他的という声も聞く」と書いてあることが気になる。

人々のつながりが強い地域では、全国どこでも、新しく来た人にとっては「排他的」に見えることが普通であろう。外から来た人が、なじんでいく営みをすれば、話しは別であるが。

その意味では、移住してくる人が、地域の人とどのような人間関係をつくっていかうとするのか、という前向きな姿勢を期待したい。そのなかでは、私が住んでいる「排他的」に見られるかもしれない南部に移住してくる若者は、それなりの考えと、地域の人々とのつながりをいとわないどころか、エンジョイしようというタイプが多い。

そういうつながりの作り方のようなこと、そして地域の人々がどんなことに直面しているのか、ということについてのガイドブックが必要なように思える。

2011年1月19日、20日

## 進路・仕事と恋・結婚・・・学生たちの人生創造物語

2003年に日本生活指導学会で、参加者の研究者たちを対象にした「人生創造の物語をつくるワークショップ」は、「浅野誠ワークショップシリーズ5 人生創造」（2010年8月自費発行）に収めたが、それを大学一年生を対象にしてみた。

全員が興味深い物語を作った。そのなかで、人気が高く、関心を集めたものに絞って紹介しよう。

1) 俺は大学生であり、もうすぐ卒業だ。まだ就職先も決まっていない。このまま卒業したら、フリーターだ。さらに母は近所付き合いのせいで、うつ病になってしまったので、おれは隣町に家を買って引っ越すことにした。ドラマで二宮はうまく就職できていたが、俺はイケメンでも嵐でもないの、就職できるか心配だ。

2) 自分はダメ人間だと思い込み、家族から孤立している大学一年生。このままじゃだめだと思い、唯一の趣味である旅行を機に自分探しの旅に出た。まずはアメリカ。想像以上に広大な世界が広がっていた。

3) 結婚願望が強い女性Aさんは、運にめぐりあえないまま30代に突入してしてしまった。なにが足りないのか悩むなか、女子力を上げるため、資格取得を決意する。そこで英検準一級を取得。それを生かし、アメリカ人男性と見事恋におちる。だがしかし、一人娘のAさんは父に国際結婚を反対される。

4) 今年で28才になるが、まだニートのダメ女。自分のやりたい仕事が見つからないという理由で、この歳になってしまった。そろそろ人としてダメだなと気づいたので、とりあえず留学に行ってみようと思う。

5) すでに三浪目に突入している21才。家でゲームばかりしているので、思い切ってゲームを処分したが、ゲームを売ったお金でおもちゃや服を作った。とてもうまく作れたので、トイザラスと同じくらい大きなおもちゃ屋を作った。

6) 大学卒業後の進路について悩む女子学生の〇〇さんは、まわりの友だちがどんどん結婚していって寂しくなり、婚カツをしようと決意するが、その前に彼氏ができない。

7) 中学生の時に付き合っていた人と成人式でもう一度出会い、またその人と付き合うことに。その男性は19歳で身長が高い。ある日仕事OFFでスッピンで変装して出かけてみると、彼とばったりTSUTAYAで会う。だが、気づかれなかったのでセーフ。その2年後妊娠し子どもを産むか悩んでいて仕事もまだ決まっていない二人。

8) かわいくなりたい女子大生は、男らしい性格で悩み中。そこで合コンに参加し、異性に見られることで女

子力アップを目指す。

9) たまたま浮気現場を見てしまったB子。ショックで恋に積極的になれない。友だちに相談したところ「彼氏できないの前に恋しろよ」と言われた。失敗は成功のもととポジティブに生きるのが良いと分かっているけど、心が動かない。トラウマになっている。そしてふと空を見上げる。

10) 今は、中学2年の冬。2年生に進級してから、同じクラスのヤンキーからパシリに使われ、教室に行くのが怖いけど、来年は受験の年なので困っている。先生に相談してみると、進学だけでなく就職もあると言われたのでインターンシップに積極的に参加してみた。

11) うきうき気分で始めた一人暮らし。好きな人ができて告白したい。しかし彼の家族から服や部屋が臭いと言われてしまった。何故だ。原因はそう!! 私が吸っていたタバコだったのだ。一人暮らしの寂しさが増大し・・・ひきこもり。

2011年9月9日、12日

## 10代若者が夢中になるものと、若者の人生おこし

10代若者が夢中になるものを、彼らの人生おこしへと発展させるという課題がある。私の最近著「沖縄おこし・人生おこしの教育」で論じている問題だ。

1960～80年代の産業と教育の主流は、若者を「成績順」に選別して、エリート的な若者には、創造性を求めるが、多数のものには、流れに沿って従順に働ける労働力、ないしはそれを「家庭」で支えるものを要求した。それに対応できるかどうか「人生おこし」につながるとした。90年代以降、それが劇的に変化してきている。世界の先進国は、単純化して言うと、すべてのものに創造力を求め、自分で「人生おこし」ができることを求める時代へと移行した。

だが、日本では、依然として前時代の流れで思考するのが大勢を占めている。そこには大きなギャップが存在する。そのギャップを埋めるべく政策的に登場したのがキャリア教育であるが、未熟な実態にある。

また、1960年代以降、家庭教育が、外注型、ないしは外注先の「下請け」機能に集中し、保護者が子どもの人生おこしを支持促進する力量が大幅に低下した。地域教育においても、同じ傾向が見られる。

彼らが人生おこしを準備していくためには、夢中になるものを人生おこしに結び付けられるようなプロセスが求められる。いいかえると、中学生高校生を含めて若者が関心を寄せ夢中になるものを育て発展させて、「人生おこし」につながるようになることが、一つの焦点になるのだ。

現状において、彼らが夢中になるものに、スポーツ・音楽芸能などがある。最近では、「ゲーム」の世界もそうだ。それには、部活・スポーツクラブやマスメディアの影響が強い。「外注型」スタイルのものも多い。それだけに、そこで提示されるものに順応が求められ、結果的に受身性を強化する役割を果たし、そこでの好成績に「人生おこし」を委ねることさえ日常的に見られる。

たとえば10代に入る前から、少年野球に打ち込み、甲子園、あるいはプロ野球をめざして高校野球をがんばる例が多い。そして、高校野球部を『引退』してやっと人生おこしに直面するが、プロを頂点とする野球秩序の中で思考する習慣が根深い中で、現実とのギャップの大きさのなかで、困難に直面する。

また、ゲームに夢中になる子ども・若者で、「人生おこし」を「ゲーマー」のなかで語るものが多いが、それこそ天文学的数字だ。

野球やゲームの世界では、職業を含めて若者の人生おこしとの距離があまりにも大きく、大人から見れば、非現実的そのものの世界である。だが、そうしたものではない社会現実とからんだものに、労働イメージと結びつけて接した体験がほぼないのが現実だ。そのなかで職場体験が、「貴重な」体験になる例があるが、まだ、成否判定できる段階にはない。

それらより、もう少し職業とのつながりを感じられるいくつかの例を、あえてあげるとすると、こんなものがある。

・小学生時期から、昆虫などの動植物の関心をもち夢中になって、それが動植物関係の職業選択へとつながっ

ていく例

- ・家業を含めて、物づくりに関わる職業が身近にあり、それに触れる中で、人生おこしにつなげていく例
- ・学校での「総合学習の時間」での環境学習が関心を作り出し、環境関連の仕事を追求していく例
- ・実業高校で、栽培・制作体験が、職業につながっていく例。
- ・肉親の介護などの体験を通して、医療福祉関係で人生おこしをしていく例
- ・保育者・看護師など、見えやすい形で親の職業に触れる体験が人生おこしにつながっていく例
- ・お菓子作りも含めて、料理に関心を持ち、料理関係の職業を追求していく例

しかし、こうした例の多くは、個人的体験と結びついたものが多い。音楽・スポーツ関係が人間関係体験と結びつきやすいのと比べて、対照的になることさえある。

そうした意味では、部活も含めて、人間関係を促進しやすい分野での人生おこしにつながる活動が多彩に展開されることが期待される。その意味で、「いろいろと取り組む」部活というのを、かつて提案したことがあるが、1種目に限定される現在の部活とは異なる部活の展開が創造されることを期待したい。

また、授業が人生おこしにつながれる例が、過剰に少ないという異常さを、なんとか打開してもらいたいものだ。それには、授業が詰め込み的なものから、研究創造的なものへと転換していくことが不可欠だ。その点では、フィンランドなどでの授業が研究創造的色彩が強く、人生おこしにつながりやすい状況から学ぶことが多いだろう。



2011年10月2日

## 「人生おこし」に関心をもつ若者が読む 私の新刊本への反応

私の新刊「沖縄おこし・人生おこしの教育」への反応・感想などを紹介していこう。

まず、この本を知った若者たちが、とくに「人生おこし」に関心をもって読む、ということについて。不覚にも、私は、このことをそれほど想定していなかった。本のタイトルからいっても、内容からいっても、若者が関心をもつのは、当たり前のことだが、もっぱら大人の読者を想定してばかりいた。

ある予備校教師が、本の内容を紹介したら、生徒がすごく関心をもったという。

ある大人が読んでいたら、息子も、自己の進路選択にかかわって関心をもつが、親が読み終わるまで待てないので、書店に買いに行ったという。

受験や進路を考える若者が、関心をもつようだ。

ストレーター型で大学に進学してきた学生の姿を、本書でかなり書いたが、その変化が、近年の沖縄学生にも表れていることを指摘した。それにかかわって、沖縄県外から沖縄の大学に入学してきた学生には、その傾向がすでに1980年代から見られることを指摘して下さった大学教師がおられる。その通りだと思う。私も深くかかわった、1970年代末から80年代初めにかけての琉球大学教育学部での教育改革は、こうした学生への対応をどうするか、と言うことに大きな焦点が当てられた。

こうした取り組みがおこなわれてきたにもかかわらず、沖縄の教育界、とくに受験指導を中心的になう受験高校の問題を指摘する声も届いてきた。

2011年10月2日

## 法経系大学生の人生おこし 「人生おこしの教育」補論

法学部、経済学部、経営学部など法経系学生の卒業後の進路は、タテマエとしては、大企業や公務員だが、現実に圧倒的に多いのは、中小企業への就職を中心としたサラリーマンへの道、あるいは起業家に類したものではないだろうか。弁護士、公認会計士、税理士などの資格取得を経ての就職は大変狭き門だ。フィナンシャルプランナーとか土地建物取引関連などといった資格はあるものの、現実には、それでの就職はそれほど多くない。

とすれば、そうした現実の進路を切り開くことを準備すること、あるいはそうした道で有利になるものを身につけることが、大学で学ぼうえでは重要になるのではなかろうか。そうしたことは、大学3年生後半以降に始まる就職活動で、いやおうなしに必要になってくる。そうしたものを受身でせざるをえなくなってからやる、というのではなく、それ以前から、主体的にとりこんでいくことが重要ではなかろうか。

そのためには、多様な経験と知識が必要だし、積極的な取り組み姿勢が必要だ。高校時代、大学時代にそうしたものを追求できる授業、部活、多様な企画で、積極的に取り組むことだろう。それがまず試されるのは、高校時代での進路にかかわる場面、あるいは大学入学後の活動だろう。生徒・学生間で進路研究会というのを持つのもいいだろうし、担当教師と相談しつつ、ゼミをそうした内容をもつものにしていくことが期待される。

そうした積極的活動の結果として、大学入試の場合に、法経系学部のどれかの学科を選ぶということにしていきたい。しかし、全国の大多数の法経系学部生の現実には、そうした選択ではなく、「選びたいものがはっきりしなかったから、幅の広い進路がありそうだから」「入試の結果として、その学部が決まった」というものが多い。

医学部看護学部工学部のように職業直結型とまではいかないにしても、現実に近そうな法経学部だが、実は「間口」が広いというか、広すぎる現実がある。かといって、「経済学」「法学」を学びたいから、という動機での選択は、むしろ稀だといってよいほどだ。

これらは高校進学の際に、進路展望がはっきりしないから普通科に行くということに似ている。しばし仕事につくことを猶予（モラトリアム）して、豊かな展望を作り出すために学業や世の中探索にいそしむことをモラトリアムというが、その探索が欠如して、ただのモラトリアムになってしまう例が大変多い。「大学生は暇で遊んでいる」という陰口はそうしたところに発生する。

そうならないために、大学のゼミやサークル、あるいは仲間たちと、様々な探索活動を積極的に行うことが重要だろう。大学側教員側もそうしたことを促進しつつ、担当科目を教えていく構えが大切だろう。そのためには、大学→就職活動→職場という流れだけでなく、多様な経験・学習を蓄積できるような流れを構築していく必要がある。

雇用を中心とした変動の激しい今後の社会にあって、そうした追求が、学生自身、そして大学自身に求められているだろう。さらに雇用側もそうしたことを促進するような雇用についての創造が必要だろう。

## 55. 生き方教育

2004年1月20日

### 久しぶりの琉球大学授業 多様な学生の出会い

私のワークショップ型授業では、多様な学生が出会い、発見しあい、共同創造へと向かうストーリーをつくりながら進行していく。今回の授業の「子ども文化特論」はまさにそうした「出会い」（地球、自然、社会、他者、自己など）を主題とするワークショップを前半に行い、それを共同創造活動としての行事づくりへと展開し、その行事のなかで、出会い・人生創造にかかわる企画を学生たちは創造していった。

もう一つの科目『生活指導』でも、私の定番である「25年後の年収は？」の「肩たたき討論」のなかで、そうした場面が、とくにジェンダー的な 이슈で登場してきた。この活動をここ5年間やっているが、年々、年収予想額が低下してきて、今や1000万円以上などというのは稀で、大半が300万円前後と100万円以下に集中する。そして、夫が収入をえ、妻が家事・子育てに専念するという性別役割分業を構想する考えが減少どころか、増加さえしている。それは中京大学でもそうであったが、まさに1960年代型生き方・生活の根強さをうかがわせるものである。

そのなかで、1000万円以上を想定するある女性の発言が光っていた。それは、性別役割分業を主張するある男性への強烈な反論として登場した。それにしても、どの大学でも、多くの学生は、こうした将来像について、余り考えないままにいること、現実的な展望をもたないでいることに特徴がある。

もう一つ「中学3年生担当の教師だったとしたら、どのような進路指導をするか」ということで、大切にすることをめぐる討論を行った。そこで、全体の雰囲気は、「進路がはっきりしていないのなら高校に行かせる」「農業高校希望だけど、普通高校に行ける偏差値がある場合には、普通高校行きをすすめる」ということに流れつつあるとき、ある社会人学生が、自叙伝的な語りをもって、それに反論し、トコロテン式に高校入学、大学入学をせずに、自分なりの判断のなかで、働き、そして学びの人生をおくっていることを語ったとき、「水をうったような」静けさが全体をおおった。こうした多様な出会いが学生たちの今後の人生創造に生かされることを祈りたい。

2004年3月17日

## 『知的障害者』にかかわる『生き方』の教育のほうが蓄積が多い

『大学で学ぶ知的障害者』を読み終えた。私自身の単行本『生き方の教育 つなぐ・つながる』（仮題）を書き終えて最初に読んだ本であったので、私の著書と関係で多くの興味深いことを発見させていただいた。まずなんといっても『知的障害者』にかかわる『生き方』の教育のほうが蓄積が多いということである。無論、この本を書いた人たちが『養護学校進路指導研究会』の方々で10年以上にわたる共同研究と大学の公開講座を10年近く実施するという共同実践の背景があるのだが。

それにしても、そのほかの学校における実践と比べると、群を抜いて先駆的である。それは、余暇・趣味、仕事、交際・結婚、生活といった『生き方』のきわめて具体的な問題をまっすぐに対象にしていることである。そして、それを、子ども・若者一人ひとりのリアルな問題と切り結びながら展開していることである。公開講座では、「本人講師」ということで、当事者を講師にして展開することが多い。多くの学校での実践は、当事者にかかわることは秘密にされ、個別相談となる。そうした当事者体験がここでは交流されていくのである。

次に学びが、ワークショップという用語は使用していないが、まさにワークショップとして展開されていることである。討論・作業・発表などまさに共同創造活動として展開されている。そのなかで多様なありようの発見をしている。それは、「自分を知り社会を学ぶ」というタイトルにもみられるように、自分自身と社会との発見・創造とが統一的視野のなかで展開されている。また、その学びは、身体・感情・行動レベルと言葉・論理レベルとを並行させて展開されている。さらに、それは個別的閉鎖的学びではなく、参加者間の交流の深化のなかで展開されている。障害者相互にとどまらず、スタッフやサポーターと同じグループをつくって、討論・作業して展開している。だから、そこには「共同の知」、さらに物語（ストーリー）が成立している。

長くなってしまった。興味深いので、今後も注目したいし、関係者といろいろと討論してみたいものである。

2005年12月29日

## 教職受講沖縄学生にみる「進路指導」感覚の新しい様相

沖縄国際大学の「特別活動研究」の授業で、「中学3年生担当の教師だったら、進路指導にあたってどんなことを重視するか」ということで、例示する10項目のなかから、3つの○と3つの×をつけることをきっかけにして討論するアクティビティを行なってもらった。その項目は、拙著『〈生き方〉を創る教育』のP28にあるものである。

今回、2クラスで行なったが、中京大学や沖縄国際大学でのこれまでの反応とは異なるものがでてきた。それは、『変化の激しい今日では、就職し社会勉強して目的をもってから高校に行くのもよい』『アルバイトは社会勉強として大切だから、15歳くらいからやったほうがいい』の項目である。これまでは、×があったとしても○はない項目であったが、今回は×はなく○をつけるグループがかなりでてきたのである。

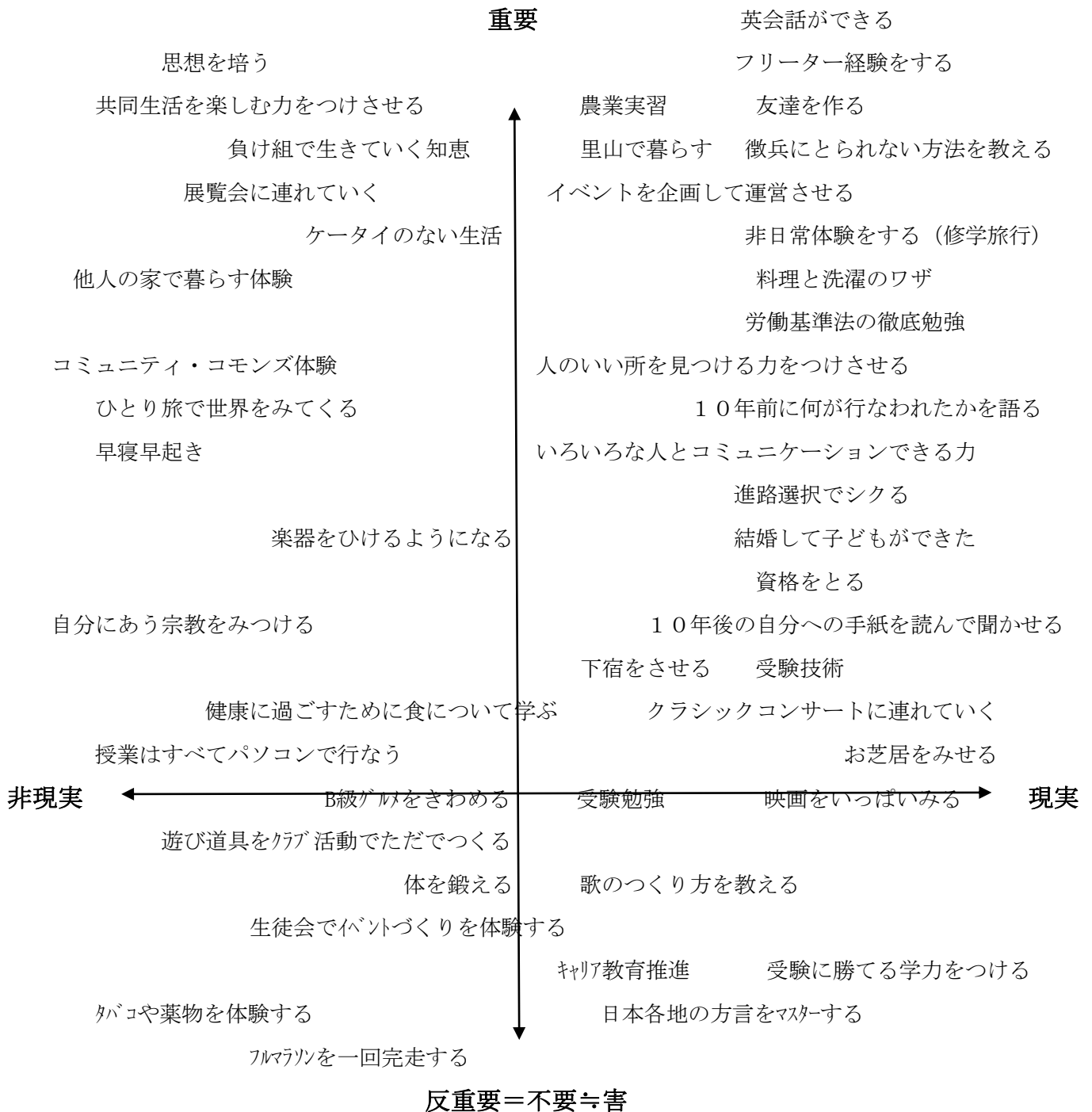
この2項目とも、「ストレーター」秩序では決して肯定されないものであった。それが肯定的なものとして登場してきたことに興味深さを感じる。「ストレーター」秩序の浸透がまだまだ弱いためなのか、それとも「ストレーター」秩序から離れはじめているのか、二つの解釈が可能であろうが、私はどちらかという、後者の様相があらわれはじめたと理解する気持ちが強い。同じ大学で同じ科目の受講生対象に行なった昨年と今年前期と比べても、この傾向が強まってきているからである。

しかし、速断はできない。こうしたことに対して、若者たちが、限定的にいうと、教職受講生の若者がどのような変化をみせていくのか、注目していきたい。

2006年3月24日

高校生の10年後のためにしていること・したいことを、重要性・現実性を基準にならべてみる

3月20日大阪高生研の集まりで、タイトルのようなミニワークショップをしてみた結果、次のようになった。参加者が自由にポストイットに記入して、縦軸（重要－反重要）、横軸（現実－非現実）でつくる象限のなかで、自分が適切だと思う位置に貼りつけたものである。人の考え方は異なるので、類似なものが異なる位置にあることは当然ある。楽しい雰囲気で行なったので、冗談っぽいものもある。（実際の活動は、四つの象限が等分されていたが、表記の都合上、横軸・縦軸をややずらした。



2006年8月4日

## 全生研大会「進路問題を考える」分科会での話題

7月30日全生研大会問題別分科会「進路問題を考える」を担当し、私が問題提起をしたあとで、参加者による討論がすすめられた。その討論の冒頭に、参加者がポストイットに記入したことのなかから主なものを列挙しておこう。

私の話題提供にかかわってだされた質問・意見・提起など（私の話題提供は大会紀要に掲載されている）

- 教師は、この情報過多の時代において進路指導で「理想」を教えるのか、「現実」を教えるのか？
- 親の生活も変容している現代で、親の生き方を歩ませたくない。親の理想や競争という現実のなかで教師はどう支援するか？
- 好きなことをやって生活できるのか？
- 教師自身の生き方の再検討を起すには？
- 中学入学段階で人生をあきらめている子に何が必要？
- 子どもが直面せざるをえない能力主義に教師はどう関わる？
- 教師の側の先入観や、職業に対する知識の持ち方で、だいぶ状況は変わるのでは？
- 「キャリア教育は企業に適した人材を育成する教育。そこからはみだした人を決して救わない」 それって本当にそうなの？

進路問題にかかわって、「私のしていること」「私のしたいこと」

- 子どもの良さをたくさん見つける。選択肢を多く提示する
- 自身の存在に対する自信
- 希望の持ち方・持たせ方
- 子どもの自尊感情を高めたい
- 総合選抜制の高校入試制度を活かす運動
- 人生航海図・計画図づくり
- 上からの「職場体験学習」への対応
- 体験の後の分かち合い作業
- 職場体験から労働と人生を考える
- ストレーター秩序からの脱却
- 子どもたちが夢をもてる進路指導がこれから必要だとおもう
- ストレーターという生き方は違うと思うが、そうでない生き方のイメージが出てこない。教師をやめた後、どんな人生があるのか、ぼんやり考えるが、孫育てのフォローぐらいかも・・・
- お互いのいいところを発見するサンキューレター
- 中高生としゃべり、平和サークル

1960年以前の「職業指導」、その後2000年ころまで続いた「受験指導・就職指導」の次のこれからの時期の「進路指導」を、キーワードで示すなら、どんなものになるか。

冒頭の※は、会場での「人気投票」の上位

- ※○ 地球人としての生き方指導
- ※○ 循環的生き方・死に方指導
- ※○ 労働と生き方の学習
  - 共同活動
  - 才能指導
  - 自分ときちんと向き合える本来の進路指導
  - 生き方指導
  - 仕事づくり指導
  - 技術学習と生き方学習
  - 人生指導

参加者のこのような発信をもとに、討論はいろいろことに花開き、これからの進路問題を考えるうえで、かなり「拡散的」に興味深いものとなりました。



2007年3月12日

## 「卒業→就職」という枠組みを越えた視野からの興味深い問題提起

横井敏郎「若者自立支援政策から普遍的シティズンシップへ」（『教育学研究』第73巻第4号）

1) 若者たちの就職支援に焦点化した多様な政策が「激しく」展開され、学校でも、それに即したキャリア教育などが盛んにいわれる。そうした政策展開について、本論文は次のように述べる。

「欧米諸国は1990年代に入って、職のない者を早期退職や病気・障害給付の受給、家事・育児といった形で労働市場から転出させることで失業を押さえ込むそれまでの社会政策から、雇用の増大を唯一最重要の目標とし、福祉の受給者を有給雇用される納税者に移行させるアプローチへと置き換え始めた。このアプローチは、社会保障の享受の条件の厳格化をともなったサプライサイド志向の労働市場政策を強調し、福祉受給の資格は訓練や労働への参加の義務と緊密に結びつけられている。これは一般にワークフェアと呼ばれ、最初に導入したのはアメリカであった。」P114

※ ちなみに、英和辞典は、ワークフェアを「（失業対策としての）再就業福祉制度」と説明している。

日本でもこの政策が多様に、というか「バラバラに」展開されているが、必ずしも成功を収めていない。それは、失業者やニート・フリーターを増やした企業側の雇用方針を問題にしないし、若者たちの現実にかみあうものになっていないことが大きい。そうしたなかで、「NPOによる困難を抱える若者支援」の二つの例を紹介しながら、「ワークフェアとは異なる実践の視点と方向」を次のように提起する。

「①若者の自立とは、本来就労に限定されるものでなく、異なる他者との関係においてその存在を肯定する自己を構築することがまず基本にあること、②個別化されるのではなく、何らかの自助的な共同関係が求められること、③地域から切断されるのではなく、地域のコミューナルな関係とネットワークの中で若者の自立がサポートされること、④就労についていえば中間的な労働市場、職場が必要であること、⑤既存の市場および労働市場自体に限界があり、それを超えるような社会的企業の創出が求められること、が若者支援実践の視点と方向として求められるのである。」P116

2) そして、次のように提起していく。

「彼ら（ウィリアムズとウインデバンク）のいう雇用と自助を含んだ仕事という言葉を社会有用活動という概念で括り、またそうした活動に参加することを社会参加と言うならば、若者たちの進路教育や進路開拓は、こうした自助概念を含んだ社会参加をイメージできるようなものとして行われなければならないといことになる。」P117

この「自助」概念は、「いわゆる有給雇用に限定された受動的な労働観ではなく、より広い労働観や職業観をもたらすものであり、同時に有給雇用のあり方自体を見直すことにもつながっていく」し、「孤立や服従、競争ではなく、集合的、相互作用的な労働の形態を指しており、互酬性に基づいた社会の形成をめざしている。つまり、自助とはcommunity self-helpとして存在するものである」というものである。

※ ここでの自助は「自給自足」に近い言葉のように響く。自給自足的なコミュニティとでもいえようか。

家事や自分自身の世話を当然含むし、さらに地域ボランティアなども含まれよう。

3) そして、これまでのシティズンシップ概念の変更を求めつつ、次のように述べる。

「これまでの福祉国家は所得再配分中心で、市民を福祉給付の客体として位置づける限界を抱えていた。そこでのいわゆる社会的シティズンシップは、完全雇用社会を前提として、有給雇用と一体となった権利として了解されていた。しかし、完全雇用が困難となり、むしろ新しい社会構想が求められている現在、シティズンシップの概念の拡張が要請されている。」

「有給雇用労働者とそれ以外の市民という二分法をやめて、社会的シティズンシップを普遍的なものに変えていく必要があるとされる。

シティズンシップ概念には、自由主義と市民共和主義の2つの系譜がある。シティズンシップを財の配分の問題としてとらえる前者に対して、政治的共同体への参加と実践としてとらえるのが後者である。シティズンシップの2つの系譜をめぐる論争を詳細に検討した岡野八代は、参加すべき政治的共同体を国家に置きがちな市民共和主義の陥穽を避けつつ、自律的な個人を前提に財の配分のルールの問題として語る自由主義的シティズンシップ論を超えて、人間を相互依存的な存在にとらえ、社会の不平等な現実と不平等な人間存在から出発してたえず自由と平等を問い直していく必要があるという。

以上のような見地に立つならば、シティズンシップは単に権利と義務がセットになったステイタスとはいえ、不断に問い直される相対化された概念となり、また参加と実践を内包した概念、すなわち参加型シティズンシップとなる」 P 1 1 7

4) 「新しい社会構想論」の展開

「人々は狭義の労働＝有給雇用から解放＝排除されるのではなく、ワークシェアリングによってそれを分かち合いながら、さらに自助を含む広義の労働に参加する機会を保障することが求められているといえる。つまり、若者たちに対しても、有給雇用が社会参加や社会的有用活動の中に組み込まれた形で提供されていかねばならないのである。」 P 1 1 7

「新しい社会構想論からは、①有給雇用と社会的有用活動の区別、②有給雇用と福祉の結合から普遍的シティズンシップと社会参加へ、③時短とワークシェアリングによる労働の権利の保障、といったことが確認される。これらはワークフェアを超えた若者の進路と支援実践の視点と方向を指し示すものといえよう。」 P 1 1 7

「前者(本論の前半でなされた困難を抱える若者を支援する民間の自律的活動の実践分析――浅野誠補注)から就労と自立の区別や自助的共同関係、地域のコミユナルな関係とネットワーク、中間的労働市場と社会的企業の創出が、後者( (2) 以降に引用してきた新しい社会構想の理論的検討――浅野誠補注)からは社会的有用活動と社会参加、普遍的なシティズンシップ、労働の権利の保障といった実践の視点と方向が抽出された。これらは重なり合う内容をもっている。就労と自立、有給雇用と社会有用活動を区別した上で、労働の権利を保障し、また新しい雇用と活動を生み出しながら、共同的な社会参加の道を若者たちに開いていくことが展望として確認できよう。」 P 1 1 8

「ブッセメイカーは、社会的シティズンシップを市民の間の多様性と同質性だけでなく、市民のライフコースにおける多様性と同質性を扱うものとしなければならないとして、労働、ケア、教育・学習、余暇などの間を移行することを保障する社会的権利のフレキシビリティという概念を提起している。社会的シティズンシップとは、労働、福祉、ケアを統合した、普遍的であると同時にフレキシブルな概念でなければならないというのである。」P118

5) このように読んでくると、私の「<生き方>を創る教育」「沖縄 田舎暮らし」で展開していることと共通する点が多い。また、「菜園家族レボリューション」構想とも響きあう。今後の展開ならびに、このような主張が社会的にどのように反響受容されていくか、に注目していきたい。

2010年4月4日

## 井沼淳一郎さんの「はたらく・つながる・生きる」現代社会授業

大阪府立福泉高校の井沼淳一郎さんから実践報告を送っていただいた。タイトルは、『大阪府金融広報委員会金融教育研究活動報告 「はたらく・つながる・生きる」 ちからを育てる現代社会』だ。一年間にわたる高校3年生対象の授業報告だ。

これまでの社会科は、教師のレクチャー中心に、生徒は「覚える」作業に徹するというのが多い実情にある。井沼さんは、それとはひと味もふた味も違い、アルバイトや進路など、生徒の生き方・生活の現実にかかわる授業を展開する。年間授業を4つに分けているが、おのおの大テーマを紹介しよう。

「身近な契約に強くなる」

「“アルバイト”の法律」

「困った時のトラブル解決法」

「正社員もラクじゃない～世界の中の日本の異常」

このテーマをもとに、生徒の現在・将来の現実にかかわるトピックをたて、教師からの情報提供だけでなく、「ワーク・トレーニング」「発表・討論」「調べ学習」など、多彩な授業形態ですすむ。司法書士・大阪府金融教育委員会メンバー・弁護士・労働基準監督署などのゲスト・スピーカーもふんだんに活用する。

極めつきは、アルバイト先から「雇用契約書」をもらってきて、それを検討する授業だ。

この中で、生徒達は従来にはない『食いつき』をみせ、授業が活性化していったことは、多くの生徒の報告からわかる。

授業で『発見する・創る・できる・わかる』喜びから追い出され、点数競争からも「脱落」した多くの生徒には、授業で追求していることが、わが身の現在・将来とどうからんでいるのか不明であれば、学ぶ意味もわからず、学習意欲もでてこない。その現象は、普通科高校の就職希望者が多いところでは、日常的にさえなっている。

そうした事態を切り開く一つの注目すべきアプローチとして、この実践は注目できよう。

と同時に、こうした生徒がもつ世界とは隔離された状態で、支配的な学校文化・教員文化が存在している状況を明るみにしつつ、両者に橋をかけるものとしての意義がこの実践にはある。

生徒の現在・将来の現実とからみ、彼らの生き方・生活に絡み合える知を創造する授業の、さらなる展開・発展を期待したい。

私なりの希望を付け加えたい。

毎回、憲法13条、契約、悪質商法などといった、小テーマがオムニバス形式で並んでいるが、それらを通して、生徒はストーリーを生み出している。そのストーリー性をもっと意識的に追求してはどうだろうか。『生徒参加』を重視する授業であるので、そのストーリー構築に生徒自身が意識的に参加するようなアプローチがあってよいだろう。小テーマ自身を生徒たちに発見創造させることもできよう。あるいは、最初から、テーマ

グループをつかって、いずれかに所属させ、そこからの問題提起を少しずつ出させ発展させていくこともできよう。

この報告書にある実践を踏み台にすれば、新たな発展はそうは難しくないだろう。

グループにこだわる必要はない。個人がフィールド、ないしはテーマをもつことで、毎回の授業に関わっていくこともできよう。生徒たちが作成している『10年ノート』は、そのためにも使えるだろう。また、生徒企画の授業があってもいいだろう。

もう一つ。これだけ優れた実践なのに、評価が100点満点法であり、さらにそのうち定期テスト70点というのは、改善の余地がおおいにある。生徒の活動に比重がかかっているのだから、その比重を大胆に高めてはどうだろうか。その際、120点、140点というのが登場してもいっこうにかまわない。そういう場合、私は、「学校のコンピュータの都合で、100点以上は、書類上100点にするしかない。許してね」と話す。

2011年12月23日

## 「学校→雇用」構図の揺らぎ 世代間時代間のずれと協同

雇用と学校との関係で、大きな時代変化をみてみよう。

1960年ごろまで、大半の若者が農業を中心とする家業を継承する構図のなかでは、「雇用」という型は限定的なものだった。

それ以後、雇用という形で仕事を得ることが一般化すると、「学校→雇用による職場」という形になる。そして、雇用は、それまでの家業継承に代わる一生の仕事という形でイメージされ、終身雇用が「標準」ないしは「目標」とされる。

高度成長期における大都市中心地域では、そうしたことを受け入れられる大企業がかなり存在したから、そのイメージは強化される。だが、沖縄では、そうした大企業は数社あるかなしかであり、それに匹敵するのは『公務員』であり、公務員願望が強力なものになった。

そうした大企業従業員・公務員の採用においては、教養と専門に関する試験が課せられるようになる。進路に関わる学校側の対応は、学校にハローワーク的機能が与えられたこともあって、新卒生徒・学生が大企業・公務員採用に適するように教育する体制が強化された。大企業・公務員雇用数が厳しく限定される沖縄でも、本土就職がかなりの比率を占めるなかで、こうした傾向が強まる。そのなかで、生徒・学生自身が進路を創造するというよりも、与えられたコースに上手く乗ることがいいという観念が成立していき、私の言うストレターコースが、1980年ころより確立する。その中で、ストレターコースになじみやすい普通高校進学者が増え実業高校生が減少していく。

そうした流れの中で生きてきたのが、現在の子ども・若者の親世代であり、祖父母世代は、その前の家業継承からの移行時期の世代だといえよう。

現在は、そのストレターコースの現実性が『狭き門』となりながらも、なおそれだけにそれにしがみつこうとする動きが強い一方で、新たな動きの模索も始まっている。その過渡期的構図の中に生きているのが、現在の子ども・若者である。

こうした世代間時代間ずれが、子ども・若者の進路をめぐって大量に発生しているのが、現在の状況である。そうしたなかで、非正規雇用、転職の日常化など、雇用をめぐる問題の大量発生がみられるだけでなく、学校においても、学習意欲減退、不登校など、多様な問題が発生し、従来の学校教育の枠組み自体が揺らいでいる。

この枠組みの移行期には、複数の枠組みが併存することも多い。そうしたなかで、「学校→雇用」という形だけでなく、「学校→雇用→学校→雇用」といった「生涯学習」的ありよう、起業家的ありよう、半農半X的ありよう、など様々なありようが広がっていきつつある。その中で、より有効で、人々の支持を集めるものが『生き残っていく』だろう。

こうした過渡期にあって、世代間ずれを世代間協同へと転換していくことが求められよう。それは個々の親

子だけでなく、制度の問題としても生じてくる。つまり、雇用、職業能力養成、学校のありようの創造的転換も求められている。このところ話題になっている沖縄県の高校再編計画、統廃合計画にも、こうした大きな視野が不可欠であろう。